だん〳〵大きくなつた話

『開山隆亳宣旨を蒙り大法を修する時、一夜白髪の老翁來り告げて曰はく、龍神嘗て一個の鐘を當寺に寄進せんことを願へり。故に明旦天龍黒瀬淵に來れと、隆亳奇異の思をなし、其の言の如く明旦其所に至れば、果して天工自然の靈鐘河畔にあり、而も其の形甚だ小なり。隆亳之を袖にして歸り、修法中之を叩くに、其都度大きさを增して、現在の一大梵鐘となれり』と、寺傳にもある通り、和尙は黒瀬が淵の龍神より、一つの小さな釣鐘を貰ひ、大いに喜んで寺へ持ち歸り、敲いて見ると何とも云はれぬよい音がする。每朝のお勤めにカン〳〵敲くのが村中に響いてそれがやがて噂の種となり、忽ち飯田の御殿樣の耳へは入つた。そんなに尊い鐘なら欲しい物だと、使をやつて文永寺から其れを取り寄せて、さて敲いて見たら『南原戀しやカーン』と鳴つた。殿樣はそれを聞いてびつくりし、早速又もと通り文永寺へ返してやつた。

それからして和尙が敲くたんびに鐘はだん〳〵大きくなつて、とう〳〵今のやうな大きな釣鐘になつたと云ふのである。

乙女夢枕に立つ話

昔文永寺の和尙が寢て居ると、一人の乙女が夢枕に立つて、『私は龍宮からのお使者で來ましたが、聞けば此の寺にはまだ釣鐘がないそうな、一つよいのを進ぜませう、明日、まだ夜の明けぬ間に、丈夫な男を五六人程連れて黒瀬が淵へ來なさい』と云ふ。

和尙は不思議な夢と思ひながらも大變喜び、其の夜の中に屈竟な男を狩り集め、乙女に云は

れた通り、夜の明けぬ間に黒瀬が淵へ來て見ると、淵の水は闇の中に岩に碎けてもの凄い音を立てゝ居る。和尚は岸の岩の上に立ち、珠數をさら〳〵と押し揉みながら、暫く有難いお經を讀んで居ると、やゝあつて水の面に光りが射して、碧い水が左右に流れると見ると、その間から釣鐘が一つ浮き出して來た。そこで和尚諸共、皆で引き上げて見るとなか〳〵重く、とても五人や六人の力では覺束ないのを無理矢理に寺まで引きずり上げて來た。今日鐘撞き堂に吊してあるのが卽ちそれである。

水の中から呼ばつた話

龍宮の入口だと昔から出ひ傳へられて居る竜丘村ホツキの黒瀬が淵の深い水底から『南原戀しや文永寺』と呼ぶ聲が聞えると云ふ評判が立つた。往來の人々が立ち止まつて、じつと耳を澄ますと、確かにその通り聞えると云ふので大騒ぎになつた。村中總出をして淵の中を搜すと、その水底に古い釣鐘が一つ沈んで居た。早速引き上げて敲いて見たら案のじやう『南原戀しや文永寺』と鳴る。そこで早速それを南原の文永寺へ納めて鐘の願ひを叶へてやつたのが今ある釣鐘である。

金の板が釣鐘になつた話

昔文永寺の和尚の夢に如來樣が現はれて『明日から此れを吊して置いて敲きなさい』と云つて、小さな金の板を一枚下さつた。和尚は喜んで、早速それを軒へ吊して置いて、翌朝行つて見たら昨日の金の板が何時の間にか大きな釣鐘に變つて居た。銘のない文永寺の釣鐘は、こんないろ〳〵の物語を秘めて、古い鐘樓の中に默つてぶら下つて居る。

耕西寺の鐘

神稻村伴野の寺坂には昔般若山耕西寺と云ふ寺があつたそうである。弘治の昔、甲斐の軍勢が伊那の谷へ亂入に及び、其所ら一面を荒らしまわつた時、此の寺も兵火に罹つて燒かれてしまひ、昔の大きな伽藍の跡が今ではすつかり桑畑になつて居る。其の時甲斐の兵共が寺の釣鐘を擔ぎ出し、上伊那郡小野村の矢彦神社まで持つて行つた。非情の鐘も故郷を慕ふと見えて、其の當時其の釣鐘は撞く度ごとに『耕西寺戀しやボーン』と云つて鳴つたそうである。

釣鐘淵

平岡村を流れる天龍川に釣鐘淵と云ふ所がある。昔此處から釣鐘が上つたので、すぐ樣それをお寺へ納めて置いた。日照りが續いて愈々田畠の物が枯れると云ふ時、村中總出の雨乞ひには、此の釣鐘を其處の淵に沈めて水で洗へば必ず雨が降ると云ふことである。

いろくの石

石成長の話

袂の中で大きくなつた石

竜丘村の時又から、天龍川を渡つて龍江村へ入ると、路傍に水神様のお社があつて、そのお庭に生き石と云ふのがある。

むかし一人の女、天龍川の河原で奇麗な小石を拾ひ、子供のお玩具にとでも思つたのか、袂の中へ入れて行くうちに、石の事などすつかり忘れてしまつて居た。暫くたつて袂がばかに重くなつたのに氣が付き、中を覗いて見ると、こは如何に、先程拾つた小石が何時の間にか大きくなり、その時つけた爪の痕まで長く伸びて居たのでびつくりし、水神様の前へ投げ捨てた。石はそれからも次第に成長して遂ひ今日のやうな大きな生き石になつた。

富士石

智里村字小野川の、田中某の家敷の内に、ちよつと富士山のやうな格好をした富士石があつて、此れも矢張り成長した石であつた。

昔此の家の主人が富士山へ參詣に行き、お山の小石を草鞋の間に挾んだまゝで歸づて來た。園爐裡ばたで草鞋を解いた時に轉がり出たその小石が、だん〳〵大きくなるので不思議に思ひ、床の間に飾つて置くと、それが次第にしとなつて行く。それで今の場所へ移して置いた所がだん〳〵と成長して今日のやうに大きな富士石になつたと云つて居る。

石觀音様

千代村字米川の山の中に、藤や葛の絡み着いた大きな石觀音様がある。此れは昔若狹の八百比丘尼が持つて來た小さい靈石であつたのが、次第に成長して今日のやうな巨石になつたの

であつた。

むかし若狹の八百比丘尼、白衣觀音を信仰して衆生を濟度し、諸國修業をつゞけて居るうちに此の土地へ來り、百姓の家に一夜の宿をたのんだ。その家の主人は大へんに喜び、比丘尼を泊めて懇ろに歡待してやつた。比丘尼は主人の親切に深く感謝し、懷中から一つの石を取り出して、さて云ふ事に、此れは白衣觀音が一夜の夢に現はれてお授け下さつた靈石である。病氣の時に、觀音經を唱へながら、此の石を頂かせると、どんな難病でも治らぬと云ふことはない。此の度の御親切の御禮に此れを進ぜませう、と云ひ置いて比丘尼は立つて行つた。しかし其のやうな靈石もその後誰れも祀り手がなく、石もそのうちに何所へか紛失してしまつて、人たちの記憶から全く忘れられてしまつた頃、向ふの山で毎夜光り物がすると云ふ噂が立つた。皆出て見ると噂の通り、不思議な光が闇の夜の山の中に輝いて居るので、搜して見ると其所に小さい石があつた。村中に生き殘つた一人の老人が、朦ろげな記憶を辿つ

て八百比丘尼の昔譚を村の人たちに語り聞かせた。それならばその靈石と云ふのは確かに此れであろうと云ふことになり、今の所へ移して祀ることになつた。初めは小さい石であつたのが、次第に成長してとう〳〵今日のやうな石觀音樣になつたのである。

手形石の話

御手形石

神稻村字佐原の追の窪と云ふ所に神の杜があつて、其處に御手形石が祀られて居る。石の上に大きな手の跡の着いて居るのがその名の起りである。

大昔、八百萬の神樣の集まり給へる高天ケ原から、使者を出雲へ遣はして大國主命に歸順をすゝめると、命は早速承知して降參したけれども、若い健御名方神だけは仲々承知しない。そこで談判が破れて高天ケ原の武甕槌神と健御名方神との間に激しい戰が始まつた。敗れて逃げる健御名方神を武甕槌は何處までもと追ひかけて、とう〳〵此の佐原の地で追ひ着いた。此所で二人の間に和睦が成り立ち、傍の石の上に手の痕を印して歸順の誓ひを立てた。追の窪と云ふ土地の名は、武甕槌神が健御名方神を追つて來たから出來た名前だとも云ひ、又この御手形石を鬼の手とも稱ぶことからして、鬼の窪の意味かも知れんと云つて居る。昔まだ此處に今の御手形神社が建たらない前の話、この石の附近を畑に開いて其處を耕す人は、何人代つて見ても皆病にかゝつて倒れてしまふ。此れは御手形石の神靈のお咎めに相違ないと云ふことに決まり、此處に御手形神社が祀られるようになつたのである。健御名方神は其の後、此處から大鹿村鹿塩の梨原へ移り住まはれたそうで、今の梨原、即ち

昔の葦原の跡へ社を建てたのが葦原神社。そのお宮の脇に塚があつて、其處には命の御靈が祀つてあるとも云ひ、又命が狩で殺した鹿を納めた所だとも云つて居る。命は此處からして諏訪の方へ移られたのであつた。

鬼が手を突いた疣石

市田村字大島山に疣石と云ふのがある。

喬木村の九十九谷が昔まだ百谷あつた頃、その谷底に鬼が住まつて居た。ある年大暴れがして、その中の一と谷が埋まつて九十九谷になつた時、鬼は居る場所がなくなつて逃げ出し、天龍川を一と跨ぎにして、三里も西の大島山へ飛び越した柏子に石の上へ手を突いた。その時の手の跡が深く石に殘つて、その窪みの中に雨水が絶えず溜つて居る。その水を採つて來

て疣に着けると奇妙に疣が治るので疣石と稱んで居る。

疣の治る話は此の他に川路村の天龍峽にもある。松林の中の大きな岩に圓い穴が二つ三つ明いて居て、それに絶えず雨水が溜つて居る。その水を疣につけると疣がなくなると云つて、お水を頂きに來る者が多い。

雷様の手形石

鼎村字名古熊の、萱垣のお寺近くへ昔雷様の落ちたことがあつた。その時周章(あわ)てゝ石の上へ手を突いたと見えて、其處の石の上に雷様の手のあとがついて居た。その石を雷様の手形石と稱んで今でも崇め祀つて居る。

切り石の由來

鼎村の切石と云へば、かなりに廣い部落であるが、それは其處に切り石と稱ばれる石があるから初まつた名前であつた。

事の起りは大へんに古く、大江山酒呑童子の頃の話のやうである。時の豪傑源の頼光の家來に荒太郎と云ふ木曾生れの男があつた。永い年月主人大事と忠義を盡したので、頼光は又とない若者と可愛がつて居たところ、木曾に殘した一人の母親が病氣だとの知らせ。親孝行の荒太郎は頼光にしばらくの暇を貰つて遙々と木曾路へ馳せ戻つた。

都に花は幾度も散つて、月日は空しく經つけれども、木曾の荒太郎からは何の音沙汰もないので、頼光は坂田の金時を迎への使者として木曾へやることになつた。金時は鉞を擔いでやつて來た。その昔、足柄山の山奥に育ち、山坂には充分に踏み馴れた金時も、不覺に谿を一つ踏み間違へて、木曾と思つて入り込んだのは此の伊那の谷、木曾へは高い山を幾つも越さねばならぬ。

金時は峠を目指して松川に沿ふて上つて行つた。丁度大雨が降つて間のない時であつたため、山から崩れ落ちた大石が一ぱいに途を塞いで轉つて居た。こんな大石が道にあつてはさぞかし百姓たちが困るであらう。取り除けるにしても五十や百の人手がなくては六づかしそうだ。長い旅路の憂さ晴らしに一つ片付けてやろうと、肩に擔いだ例の大鉞を振り上げて、大江山に鬼を斬つた時の勢で打ち下ろす。と、石は見事に眞つ二つになつて兩方へすべつて道がすつと開いた。これが今の切り石であると云ふ。

又一說として次ぎのやうにも傳へて居る。

昔九郎義經が碓氷へ越える途中、伊那へは入つて此のあたりまで來て見ると、見上げるやうな大石が道の眞中に轉がつて居る、お供の辨慶が腰に差した大刀を抜いて、眞つ向に切り割つて道を開いたのがそれだと云ふのである。

辨慶が割つた夫婦石

清內路村を黑川に沿ふて山の方へ上つて行くと、川を隔てゝ大きな石が二つ向き合つて居る。昔はそれが一つの岩であつたのを、義經が此處を通行する時辨慶が手にした金剛杖で突き割つたために二つになり、それからして此の石は夫婦になつた。

その石が大晦日の晩になると、聲を立てゝ泣いたと云ひ、一名夜泣き石とも稱んで居る。

辨慶に切られた石

辨慶が切つたと云ふ石は此處にも一つあつた。

赤穗村から西駒ヶ岳へ登る山の口の、通稱切石原と云はれて居る原の中に大きな石があつて、その上に丁度切られたやうな格好をした石が乗つて居る。昔坊主辨慶が義經のお供をして奥州に下る時、此處を通つてこの石を切つたと云ふのである。何のために辨慶がそれを切つたのかはもう忘れてしまつて居る。

刀痕石

石を切つたのは辨慶たちばかりではなかつた。

和田村から萬古（まんこう）の谷を通つて泰阜（やすおか）村の温田（ぬくだ）へ出る峠路に、大きな石があつてそれに刀の痕が二た筋ついて居る。これは昔領主遠山家の落武者が、追つ手の勢と斬り合つた時に切り付けた刀の疵であつた。

馬蹄石の話

長石寺の駒の足跡

竜丘村時又、長石寺の境内にある鐘楼の敷石に駒の足跡が一つ殘つて居る。それは昔此の寺

が火災に會つた時、本尊のお觀音樣は一頭の白馬に乘つて火焔の中をお逃げなされた。その時に殘した蹄の跡だと云つて居る。

此と同じ話は上久堅村の中宮平にもある。此の部落の川端に駒の蹄の跡のついた石があるが、昔其處に藥師樣の御堂があつて、それが火災に罹つた時、お藥師樣はいち早く馬に跨つてお逃げなされた、その時についた蹄の跡だそうである。

源平兩軍の足の跡

龍丘村を流れる臼井川の川端には、昔平家の殘黨が此處へ逃れて來て、馬に水を飼つたと云ふ駒の蹄の跡や、馬桶の跡などが、幾つも石の上に殘つて居る。

又昔一人の座頭があつて此の川端を通りかゝり、平家ヶ瀧の水音に驚いて手を突いたと云ふ

手の跡もある。その隣りの伊賀良村へ行けば其處の久米川の岸の岩の上には熊谷直實の乘つた馬の足跡と云ふのが殘つて居る。こゝらあたりは昔源平の合戰のあつた所だなどと云つて、合戰洞などの地名もある。

駒つぶれ

駒の足跡は宮田村字新田の駒つぶれにもある。此處のは大きな花崗石の面に、大きな蹄の形がはつきりとついて居る。傳ふる所によると、木曾冠者義仲が駒ヶ岳を越えて伊那へ攻め込んだ時、此處まで來ると乘馬が疲れて倒れてしまつた。その時踏みつけた蹄の跡だと云ふのである。

駒の蹄石

赤穂村字北割に駒の蹄石と云ふのがある。平らかな石の面に、まさしく駒の蹄の痕と覺しく深く堀れ込んだのが一つと、此れと並んで、石の端れに蹄で削つたやうなのが一つ殘つて居る。これは昔東駒ヶ岳から西駒ヶ岳へ神の駒が飛んだ時、此の石の上へ一と度飛んで、それから西駒へ飛び上つた時の足跡で、石の端の削れて居るのは駒がすべつて、その時ついた跡だと云つて居る。

豐後岩

龍江村の尾科(おなし)部落を流れる木の根川の川端に、尾科豐後の岩と云ふのがある。道のすぐ上手に大きな岩が三つ行儀よく重なり、川の中にも一つ大きなのが坐つて居る。上の三つは巨人尾科豐後が積んだ岩で、豐後はその岩の頭から川の中の岩の上へ六七間を飛び下りた、その時の足跡が二つ、大きな窪みになつて岩の上に殘り、そのまん中に梢小さい穴が一つあつてそれは豐後の睾丸の跡だと云つて居る。

瘧を病む人は朝早く此の豐後岩の穴へ溜つた雨水で顔を洗ひ、豐後のお墓詣りをすれは、きつとその病氣が治ると云ひ、又その穴の溜り水を疣につけると早速疣が落ちると云はれて居る。

天狗の足跡

石の上に跡をつけて歩いたと云ふ物の中には勿論天狗の類もあつた。

赤穗村字南割の小川に架けた土橋の袂に、苔の蒸した大きな岩があつて、その上に大きな足跡が二つ、二尺ばかりの間を置いてついて居る。それを土地の人たちは天狗の足跡と稱んで居る。

此の土橋の下には小豆洗ひが居つた。夜此處を通ると橋の下で、サク〳〵　サク〳〵と小豆を洗ふ音がする、と云つて今でも人はこわがつて居る。

水神樣の足の跡

泰阜村字稻伏戸の水仙淵の岸の岩の上に普通の人の五倍程もある足跡がついて居る、此れは水神樣の足跡だと云ふ。その足跡へ石を投げると雨が降ると云ひ傳へ、夏の日照りの時には今でも此處へ來て雨乞ひをすることになつて居る。

夜泣き石の話

昔から泣かない者の事を一と口に石か木か、などゝ云ふが、その石が泣いたと云ふのだから只事ではなかつた。佐夜の中山夜泣き石の話は誰知らぬ者もない程に有名であるが、石の泣いた話は決して其所ばかりではなかつた。例を擧げる事は差し控へるが、越前國吉田郡の光福寺の境內へ、朝倉氏の屋敷跡から運んで來た石が、毎夜泣き聲を立てたと云ふ話は、明治も三十年頃になつての事だと聞いて居る。

石何が故に泣くかを此所で云ふのではないが、昔の、學者でない多くの人たちの心の底に、石にも魂が宿つて居て、時あつては聲を立てゝ泣くかも知れぬと云ふことを、將さに忘れんと

しつゝも尙ほかすかに憶へて居る人があつて、何かの場合、ふとその聲を聞くのではないかと思ふより外には考へようもないのである。

子泣き石

上郷村字天王原の田の畔に子泣き石がある。その石が昔は悲しい子供の聲で泣いたと云ふ。正德五年六月の大洪水で飯田の城下は泥海のやうになつた、未滿水と稱んだのがそれであつた。その時山から崩れて來た大岩が、此處で可哀そうに小兒を一人壓し殺した。それから後の毎夜毎夜、その石の下で小兒の泣き聲が聞えるようになつた。悲しそうなその泣き聲を憐んで、村の人たちが供養のために其の石の上にお地藏樣を建てゝやつてから、小兒の泣き聲は聞えないようになつたそうである。

今では夜泣きの兒を此のお地藏樣に願かけをすると、その癖が治ると云つて御願ひする者がある。御利願ばたきのよだれ掛けを、お地藏樣は幾つも頸にかけて居らつしやる。

夜泣き石

上郷村字黑田の畑の中にある古塚の石が、昔は悲しい聲で泣いたと云ふ。

むかし一人の旅人が病氣に罹つて行き倒れ、此處の冷たい土の下に葬られた。墓の標にのせた石には眞つ黑く苔がさびて、それに浮ばれぬ魂が宿つたのか、日の暮れかゝる頃、その塚の周圍を三度廻ると其の墓の石が悲しい聲を立てゝ泣いたと云ふ話である。

千人塚の赤子石

會地村字駒場の入り口にオシナ坂と云ふ小坂がある。

昔此の坂の頭に逢地の關があつたので、坂の名前は逢地の坂から轉じたものだと云はれて居る。此の坂頭に大きな石が一つ、持ち主に崇ると云つて坂の下から此處へ曳き上げられた。これが昔の夜泣き石であつた。

昔此のあたりに大合戰があつて、その時の死人を一しに集めて埋めたのが今の千人塚のある所、此の合戰に前原の代官の何がしも此處で討死した。その妻女が稚代の勇婦で、抱へて居た赤兒を其處の石の陰に隱し置き、長刀を振つて敵と戰つた、その間にどうしたはづみか赤兒が石の下になつて死んだので、妻女はこれまでと覺悟を決め、山傳ひに落ち延びて自害した。今其處を自害所と稱んで居る。

それから幾日か經つて、その石の下から乳を欲がる赤兒の泣き聲が聞えるようになつた。月の暗い晩など、石の下で泣く赤兒の聲を聞いたと云ふ者は大勢あつたそうである。乳の出ない母親や、乳の病氣に惱む女が、此の赤子石に御利願をかけると不思議に病氣が治ると云ひ、遠方からわざ〳〵お參りに來る者もあると云ふ。

乳に御利益のある石は、この他に波合村にもあつた。

波合村の南に當る山の中腹に、夫婦石と稱ぶ二つの大きな石がある。下にある丸形なのが男石で、上にあるのが女石だ、その女石の隙間から絶えず雫が滴り落ちて居るのを人たちは乳だと云ひ、乳の出ない女が此の雫を乳房へつけると乳がよく出ると云はれて居る。

靈神赤兒石

靈智里村字小野川の路傍にある赤子石は、赤子の夜泣きを止める靈驗があると云はれ、夜泣きの兒を持つ母親たちは、紅白の布切れに赤子石靈神と書き、その兒の干支を認めたお旗を上げてその石に御利願をかける習はしである。

むかし其の石の上に一夜の宿を求めた母子の旅人があつた。その夜、どうしたわけか母親は急病で亡くなつて、あとには小さい子供だけが一人殘された。其處へ山犬が一匹現はれて來て其の子に飛びかゝらうとすると、其の子が馬鹿にきつい子と見えて、その石の上に立ち上がり、力足を踏んで山犬を叱りつけた。その權幕に山犬はびつくりして其のまゝ山の方へ逃げ去つた、と云ふ話が其處に殘つて居る。

不思議な石いろ〳〵

立石寺

天安の昔、宥範と云ふ高僧が諸國を遍路の途中、三穗村へ來てしばらく足を止め、負ひ摺の中から聖德太子御作の十一面觀世音を取り出し、これを本尊にして一寺を建立した。その夜、大きな石が一つ、ひよつこりと地上に現はれて奇瑞を示したのに因んで寺の名前を立石寺（りつしやくじ）と稱ぶことにした。伊那順禮第一番の御札所で、土地の名も立て石と稱んで居る。

此の附近一帶は有名な立石柿の產地であつて、此處の柿の木を他所へ移植するときつと味が變ると云はれ、これは有難いお觀音樣の御方便だと云ふ事になつて居る。

甲賀三郎と犬石

むかし三穂村字立石の地頭に甲賀三郎と云ふ弓の名人があつた。毎日山へ登つて狩をするのに、三郎の矢面に立つて生きて逃れるものとては一つもなかつた。或る日二匹の犬を連れ、いつもの通り觀音山へ分け上り、獲物を捜しまわつて居ると、見事な大鹿が一頭とび出して來た。三郎はよい獲物と喜んで矢を番がへ、よく狙つて切つて放すと、その矢正しく大鹿の眉間の所へ當つたかと思ふ時、鹿の姿がふつと消えて其處に一寸八分のお觀音樣が立つて居た。それと同時に二匹の犬はそのまゝ其處に石になつてしまつた。今犬石と稱んで居るのが卽ちそれである。

眼の當りにこの不思議を見た三郎は、これまでに犯した深い罪業を悔いて發心した、そして

寺へ千頭山と云ふ名を奉つて、その時限りに殺生を止めた。獸を千頭も殺したと云ふ申し譯のためかも知れぬ。

今立石寺の本尊佛の胎内に納まつて居る觀世音の御像は、三郎が此の時山から持ち歸つて寺へ納めたものである。

甲賀三郎が獲物の鹿の皮を干すのに平常使はれたと云ふ大岩が阿智川の岸にある。ちよつと其處ら近邊にない程の大きな岩で、それを俗に鹿岩と稱んで居る。

瘧に罹る瓢簞石

上飯田町長久寺の境内に、瓢簞石と稱んで瓢形の浮き出た石がある。それを踏むと瘧に罹るとか云つて、人は避けて通つて居る。

昔この近くに大酒呑みの百姓があつた、毎日大瓢簞へ酒を買はせて朝から晩まで飲みつゞけ仕事も碌々せないので家は次第に貧乏になり、しまいの果てには其の日の暮らしも立たなくなつた。お神さんは亭主の大酒呑みに困り果て、比の瓢簞奴と、ある日それを庭の石へ投げ付けて微塵に碎いてしまつた。お酒の飲めなくなつた亭主はそれが因で間もなく死んだ。すると其の毀れた瓢簞が石に化けて、それが夜になると『お酒が飲みたい、お酒が飲みたい』と云つて泣く。お神さんはそれですつかり怖ろしくなり、その石を長久寺へ納めて有難いお經を讀んで貰つたので、石の泣くのは止んだ。それでもまだ何か未練が殘ると見えて、その石を踏むと瘧に罹ると云つて居る。

蝮石

昔智里村から波合へ、峠を越して行く旅人が途中で俄かに病氣になつたのを、其處の茶店の夫婦が懇ろに介抱してやつた甲斐があつてやがて病氣が全快した。旅人は此の上もなく喜び、知らぬ旅の空での此の御高恩はとても言葉に盡しようもないが、たゞ志ばかりのお禮だと云つて、懷中から黑い小石を一つ取り出し

『これは駒ヶ岳の蝮石と云つて、日本に二つとない石だ、若しも蛇に嚙まれた時は、此の小石を濡らして疵口に當てるとしつかりと着く。石が蛇の毒を吸ひ取ると石は自然に落ちる。落ちたその石を水に入れると蛇の毒を吐き出して再びもとの小石にかへる、小石が疵に着かなくなつた時は躰に毒のなくなつた證據である。まさかの時の用心に此の石を進ぜませう』

と云つて旅人は立ち去つた。石はそのまゝ忘れられて長い間神棚の隅に轉がつて居たが、ある時村の者が蛇に嚙まれて既に命危く見えた時、茶店の亭主は不圖その石の話を思ひ出し、云はれた通りに試して見ると不思議に傷が全快した。蝮石の評判はそれから村中に高くなつ

た。その後に至り、ある時其の石を借りた者が慾心を出してその石を二つに割り、その片割れを隱して置いた所、折角治つた傷が遽かに痛み出し、それが因で死んでしまつた。二つに割られた其の石も其の時限りに靈驗を失ひ、行く衛さへも分らずなつてしまつたと云ふ。

米喰ひ石

鼎村の矢高の森から南を見ると一面の桑畑で、人家離れたその路傍に大きな米喰ひ石と云ふのがある。昔百姓が米俵を背負つて此處を通りかゝり、俵を其の石の上におろして一と休みして居る間に、うと〳〵とよい心持ちで居眠りをした。間もなく眼を覺まして見ると大事な米俵が何處かへ行つて影も見えぬ。百姓は不思議に思ひ、家へ歸つて其の話をすると、次第にその話に尾鰭がついて、それは確かにその石が食つたに違いないと云ふことになつた。口も何もない大きな石が今でも其のあたりに轉がつて居る。

化け石

上鄕村字別府の御殿山の下に化け石と稱ぶ家がある。その家の垣の根元にある大きな石が昔はいろ〳〵に化けて往き來の人を脅かしたと云ふ。今でも化けそうな格好をしてそのまゝ其處に坐つて居る。

三つ石と小猿

下久堅村の知久平に三つ石岩と云つて大きな岩が三つ、上手に重なり合つて其の間に山王樣

が祀つてある。昔此の近所から天龍川の川西へ移つて行つた者があつた。引つ越す時に日頃飼ひ馴れた小猿も一緒につれて行つた處、小猿は久しく住み馴れた知久平の空を戀しがり、川西へ移つてからも日に一度は必ず川を越えて山王様へお詣りに行く、何時も途中の河原で美くしい小石を一つ拾つて行つて、山王様の御手洗へ投げ込み、水底へ溜る石の數の殖えるのを見て樂しんで居た。

ある日渡し場の船頭が僅かばかりの錢に眼がくらみ、可哀そうにその小猿を殺してしまつた。それからして後、殺された小猿が祟つたのか、その附近には絶えず馬鹿が生れると云ひ傳へられて居る。

乳母が懐の股引岩

喬木村の大和知に乳母が懐と云ふ所がある。知久の神峰城(かんのみね)が武田に攻められて沒落する時、知久家の若様を乳母が抱へて城を逃げ出し、此處まで落ちのびて暫らく隠れて居た所だと云はれて居るが、その時に穿いて居た股引を、傍の岩の上に懸けて乾かした跡と云ふのが、そのまゝ岩の上に殘つて居るのを俗に股引岩と稱んで居る。

ハブチ稲荷の蠶石

赤穗村大田切川の岸に沿つた丘の上に ハブチ稲荷様 が祀られて居て、其處には拳程の石が澤山に供へてある。お參りした人が其の石をお借り申して持つて歸り、神棚へ祀つて置くと其の年は養蠶が大當りで、その上に夜もの（鼠）が一せつ出ないと云ふ。それで養蠶がすむと御禮參りには先きにお借り申した石の數を倍にして御返へし申す、それ故にだん〳〵と石

の數が殖えて行くと云ふのであつた。

浮き石

赤穗村地籍の天龍川の中に大きな石が一つ、渴水の時でも水出の時でも、いつも同じ位に水の上へ頭を出して居るのが不思議であつた。あれはきつと浮いて居るのだと云つて浮き石と稱んで居る。

鸚鵡石と木魂石

南向(みなかた)村の大草に人眞似をする鸚鵡石と云ふのがあり、同じ村の中尾にも木魂石と云つて、人が

傍で話をするとその通りに返事をする石がある。

神樣に祀つてあつた石

伊那町字内の萓の何がしの家で、昔から代々子供の頭にくさけ（でき物）の出來る家があつた。さんざん醫者にもかゝつた揚げ句、更に効果が見えないので、法印樣をたのんで占(み)て貰ふと、神樣の御託宣があつて云ふ事に、此の家の屋敷地内に昔神樣に祀られた石が埋もれて居て、その石が出たい〳〵と思ふ一念で斯かる祟りをするのである。その石初めは白い花の木の下にあつた。最初は梨の木の下で、その木が伐られてからは白躑躅の木の下へ行つて居た。而しその躑躅も伐り絶やされて今では行き場に迷つて居る。今からわしが此の手の平に燈明を點して祈りながら行く、若しも途中で立ち止まつたならばその先き三尺の所を堀つて見

よ、と云ふのである。そこで教へられた通りの所を堀つて見ると、如何にも神樣にでも祀られそうな石が一つ埋もれて居た、早速堀り起こして神樣にお祀り申し上げたら子供のくさけはさつぱりと治つて終つたそうである。

明神樣の腰掛石

朝日村の字平出から有賀峠を登つて行く路傍に俗に大石と稱んで居る石がある。而し此れは明神樣のお腰掛石であつた。昔平出の人たちが氏神樣の法性神社に諏訪の明神樣を勸請する時、明神樣の御輿を此處まで擔いで來ると遽かにそれが動かなくなつたので、此處へ御輿を据へて暫らく休んだとの事である。而しどうして又それが動き出したかは、もう語る人もなくなつて居る。

善光屋敷のお腰掛石

ちよつと腰を掛けたと云ふ話ぐらいで、それが大へんな名所になり、參詣人が一年ぢう絶え間がないと云ふ事は、さすがに一光三尊の阿彌陀如來だけの事はあつた。座光寺村の善光屋敷、元善光寺の東方二丁の所に石の玉垣を繞らした古い石が一つ、此れが卽はちお腰掛石である。

推古天皇の十年、國司に從つて都に上れる本多善光が、或日難波の堀江の端を通つて阿彌陀如來樣に呼び止められた。その時如來樣は水の中より『善光よ　善光よ』と呼んだそうである。呼ばれた善光が水の中をのぞくと其處に御光の射して居たのが閻浮提金、一寸八分の如來樣であつた。善光うや〳〵しく拾ひ上げ奉つて三拜九拜、背中にしつかりと結びつけて生

れ故郷の座光寺へ歸つて來た。そしてわが家の軒下の石の上に一と先づ下ろし奉つたと云ふのである。それからして以來千有餘年、お腰掛石はそのまゝに本多善光誕生の靈地に祀られて、元善光寺の名と共に今日に至るまで尙ほ不朽である。

地名緣起の話

搜したら切りのないのが此の地名緣起の話であろうと思ふ。此所にはそのうちの僅の例を擧げて置くのに止める。

駒場と駒の牧場

天地開闢の昔、天八意思兼命（あめのやこころおもひかねのみこと）が今の會地村字駒塲の地へお降りになつた。今でも大沼と云ふ地名が殘つて居るやうに、その頃は四方一面の沼であつたのを、命がすつかり水を干して葦原にした。葦が一めんに茂つて居るので葦野が原と稱んだのが、今日阿智（あち）と云ふ名に其の時の名殘を止めて居る、と云ふのである。葦の生へ茂つた葦野が原へ、命は大勢の神樣たちを呼び集めて春秋二度の大競馬を催した。その時の駒を平常は此處へ放して置いたので、此處を神駒の牧塲と云ひ、それが駒の牧塲になり、やがて今の駒塲と云ふ名前になつた。別に此の地をこまがひの里と云ふのも矢張りこれからして初まつた名であろうと云ふ。

畫神と日本武尊

むかし日本武尊が東國を征伐しての歸り途、信濃國を通つて美濃路へ越そうと智里村の御坂

峠へさしかゝつた。此のあたりは山岳極めて深く、見わたす限り千山又萬岳で、それに雲が一ぱいにかゝり、志ざす方角は何方か少しも見當がつかぬ。流石の尊も暫の間小手をかざして思案なさつて居ると、其處に住む惡神が尊を苦しめようと、大きな白鹿に化けて尊の前に立ち塞がつた。尊はそれを見て怪しみ、折から口の中に嚙んで居た蒜を鹿を目がけて投げ付けるとそれが丁度鹿の眼に當り、鹿は立ち所に死んでしまつた。すると俄かに濃い霧が捲き起つて四方を立ちこめてしまひ、一寸先きの見分けもつかず、尊はそのために御坂峠の山中を彼方此方と踏み迷ふよりほかはなかつた。然るに不思議にも何處からか一匹の白狗が現はれて來て尊を導き、漸くにして人里へ出る事が出來た。

それから以來、此の峠を越す時は蒜を嚙んで通れば妖氣に打たれるやうなことは決してないと云ふ。

此處を昔は蒜嚙みと云つて居たのが今日では畫神と云ふ文字を書くことになつて居る。

横旗の信玄塚

下伊那の南端根羽村に横旗と云ふ所がある。天正元年の春三月、武田信玄が三州の野田城を攻め、敵の彈丸にあたつて戰死した。甲斐の軍勢はその喪を秘して、夜に紛れひそかに旗を横へて退却した。そして本國へ歸る途中、此の根羽村を過ぎて其處に信玄の遺骸を葬つた。

今の横旗の地が卽はちそれである。

その後此所に新道が開鑿されて、信玄の墓がその道の下になつてしまつた。その頃此の新道を鈴音勇ましく上つて來る馬が、信玄の墓の上まで來ると、どの馬もどの馬も皆足を縮めて動かなくなる。これは必定信玄公のお腹立ちに違いないと云ふことになり、早速お墓を新道の上へ移したのが今日の横旗の信玄塚である。

神原の將軍塚

神原村の坂部はもと左閑邊と云つた。昔此處に駒場から來た左善、阿閑の夫婦が住んで居た。ある時侍が二人途に迷ひ難儀して來たのを、夫婦が懇ろに勞はつて宿めてやつた。明くる日二人が出かける時、夫婦の名前に因んで此の後この里を左閑邊と稱ぶように、と云ひ殘して行つた。村の人たちは此の二人を木曾義仲の主從だと云つて居るが、二人は其所から向方(むかがた)へ出で、路傍の黃楊(つげ)の枝を結び合はせて目標(めじるし)にして置いた。土地の者は此れを將軍黃楊と云ひ、今では其所を將軍塚と稱んで居る。

便りが島

木澤村字木澤から本谷川を溯つて奥へ行くと、西澤岳の麓に便(たよ)りが島と稱ぶ平地がある。人里離れて遠い此の便りが島の仙境には哀な物語が傳へられて居る。

昔遠山氏が百姓一揆に攻められて殁落する時、一族の者が皆思ひ〳〵に落ちて行くうちに、土佐守の奥方は僅ばかりの從者を連れて、途なき途に踏み迷ひつゝ、此の山の中に辿り着いて此處を暫らくの住居と定めた。もう二度と此の世に出る望みは絶え果てたが、たとへ此の身は此處に此のまゝ朽ち果てゝも、せめて一度は家からの便りが聞きたいと、くり返へしくり返へし泣き悲しんだ末にとう〳〵此處に一命を終へた。奥方の哀れを憶ひ出す記念のために、其所を便りが島と稱ぶやうになつたそうである。西澤岳に雲がかゝるとやがて空が晴れるそ

うな。

烏田の哀話

神稻村伴野の山添ひに烏田と稱ぶ沼田があつて次ぎのやうな話が殘つて居る。

五月雨時の夕方、烏も暮れを急いで塒に歸る頃であつた。一人の子供が黃昏の田の畔を父を搜して歩いて居た。野良へ仕事に出た父親の歸りの遲いのを幼な心に氣づかつて、子供は山添ひの沼田を彼方此方と搜して見たが、更に父らしい人の影は見えなんだ。次第に逼つて來る夕闇の中に包まれるやうにして、子供はしよんぼりと家へ歸つて來た。

父さんは、と聞かれて、父さんは居ない、田圃の中に烏が一羽居たばかりだ、と答へる。

話の樣子が怪しいので人たちがその沼田へ來て見ると、搜される父親は沼田の深みへ落ちて

既に綷切れて居た。髻の黑いのが水の上に見えて居たのを、子供は烏が居ると思ひ違へて居たのであつた。それからして村の人たちは此の氣の毒な話を忘れないために此處を烏田と稱ぶようになつた。

地藏澤

神稻村の小園に地藏澤と云ふ所がある。其處を流れる小川が或る年の洪水で其處ら一めんを荒しまわつた事があつた。幾日か經つて漸く水が引いたある朝、水番の爺さんが半身を泥の中に埋めたお地藏樣を河原で見付け出した。勿體ないと大勢で擔ぎ上げ、小さい御堂を建てゝ祀り込んだのが今の地藏堂で、地藏澤の名はそれからして初まつたのだそうである。

ケチ田（病田）

俗にケチ田又は病田と稱ばれる地面は諸所方々にある。ケチは方言で、難癖をつける事をケチをつけるなどゝ云ふ。そう云ふ地面は持主に祟りをしたり、買手に不幸を與へたりすると云ふ。又何を作つて見てもよく實らないとも云はれて居る。通例そう云ふ場所は昔のお仕置き場か何かの跡で、澤山の亡靈が浮ばれずに宙に迷つて居るため、其の土地にケチがつくと云ふのだそうである。こんな所は持主が代々替つて居る。

阿彌陀田圃の如來樣

鼎村の萱垣稻荷の近くにある阿彌陀田圃も昔は矢張りケチ田であつた。不思議なことに此處へは何を作つても實らない。苗を植えれば根が腐り、麥を蒔いても芽が出ない、持主の爺さんは精根がつき果て、今日もぶつ〳〵小言を云ひながら耕して居ると、かちりと鍬の先に應へたものがある、堀り起して見ると阿彌陀如來の御像が手は手、頭は頭、胴と足と云つたやうに、蓮座までがばら〳〵になつて堀り出されて來た。勿體ないと拾ひ集めてお寺へ納め奉つてからは何を作つてよく出來るようになつたと云ふ。

杵が塚の話

上飯田町羽場の路傍にある古い櫻の樹の下に『自他倶寂』と塚標の建たつてゐるのが杵が塚である。

昔此處に年寄りの喜内夫婦が小さい餅屋の店を開いて居た。ある晩宿めてやつた山伏が夜半に杵で夫婦の者を打ち殺し、有り金を浚つて逃亡した。近所の人たちは大へんに氣の毒がり懇ろに二人を一しよにして櫻の根元へ葬つてやつた。當時人稱んで喜内が塚と云つたのが今では杵が塚と稱ばれて居るのである。

又次ぎのやうな話も傳はつて居る。

昔其處に年寄夫婦が小さい餅屋を營んで居た。或る日二人が餅を搗いて居るうち、どうした

機會(はづみ)か爺さんの手許が狂ひ、手返へしの婆さんを臼の中へ搗き込んでしまつた。爺さんはさん〳〵に泣いたけれ共取り返へしはつかなんだ。近所の人の手を借りて婆さんの亡き骸を臼と杵と諸共に懇ろに葬つて、其の上に一本櫻の樹を植えて置いた。此れが今の杵が塚で、此所には餅屋の婆さんが今は安らかに眠つて居ると云ふのである。

蛇が澤の大蛇

山吹村の蛇が澤には今でも蛇が多いそうである。まだ此のあたりが山奥であつた昔のこと、春先きで陽氣が暖くなつたので、村の百姓が二人連れで山稼ぎに出掛ける途中、道のまん中に御幣の切れが落ちて居た。大がいならば踏むか跨ぐかして通つて行くのを、信神深い一人の百姓が勿體ないと拾ひ上げ、紙捻りに捻つて髷へ結び付けて置いた。

薪も澤山に採れたので、二人は日當りのよい芝生の上に横になつて休んで居ると、俄かに眠氣を催して遂ひ二人とも寢入つてしまつた。間もなく一人が眼を覺して起き上がると、何とも云へぬ腥い氣かする。不圖傍の連れの一人を見るとは如何に、髻に結んだ御幣の紙捻りが蛇になつて、その舌の先きから劍のやうな火を吐いて居る。驚いて見上げると、二人に近い樹の株の上に頭を擡げた大蛇が今一と呑みと二人を覘つて居るのであつた。それを見た百姓は連れの一人を搖り起す間も遲しと、傍の鉈を執つて大蛇を目がけて投げ付けたまゝ一目散に山を驅け下りた。大蛇はそのまゝ山を越えて何處へか逃げ去つた。その夜其の百姓は蛇の毒氣にあたつて死んでしまつた。信神深い連れの一人は髻に結んだ御幣の切れが魔除けになつて大蛇の毒を防いだために間もなく全快した。今蛇が澤と稱んで居る所がそれである。

杵原と箱川箱淵

昔山本村に金持ちと貧乏の百姓とが軒を並べて住まつて居た。ある日の夕方、汚い坊さんが一人、ふらりと何處からともなく來て、金持の家へ行き、今夜一と晩宿めて呉れとたのむ、その家の爺さんは慾深かで、坊さんの汚ない態(なり)を見て邪慳に斷つてしまつた。坊さんは致し方なくお隣りの貧乏人の方へ行つてたのむと、その家の爺さんは喜んで宿めて呉れた上に、たつた一枚きりの自分の布團まで持つて來て着せて呉れた。

明くる朝坊さんは懇ろに宿の爺さんにお禮を述べ、さて云ふ事に

『わしは實は此の世の人の心を見たいが爲めに、假りに姿を變した如來である、そなたのよい心掛けにはつくゞ〳〵感じ入つた、その褒美に家の前へ一本の木を植えて進ぜるから、何にで

も拵らへて使ひなさい』

と云ふかと思ふと坊さんの姿は掻き消すやうになくなつた。

爺さんは不思議なことに思ひながら、暫らくぼんやり立つて居ると、やがて坊さんの言葉どうり家の前へ一本木が生へて、それが見る間にずん〳〵と大きくなつた。爺さんは教えられたやうに其の樹を切つて臼と杵とを拵へた、そしてその臼で餅を搗くと、五合の餅は一升に一升の餅は二升にと倍づゝ搗け上がる。

隣の慾深か爺さんはそれを見て、その臼と杵とを借りて來て自分の家ではきつと十層倍にでもなるやうなつもりでせつせと餅を搗く、すると不思議にも二升は一升に、一升は五合と餅はだん〳〵に減つて行く、慾深爺さんは大層立腹し、とう〳〵その臼を打ち碎き、杵をば其所らあたりの山の中へ投げ込んだ。

そんな事とも知らず貧乏な爺さんが臼貰ひに來て見ると此の始末なので、泣く〳〵毀れた臼

の缺けを拾ひ集め、それで錢箱を拵らへて、毎日薪を賣つた儲けを少しづゝ入れて置くと、それが知らぬ間に小判になつて爺さんは忽ち長者になつた。

それを見た慾深かの爺さんは無理矢理にその錢箱を借りて行き、小判の山でも拵らへるやうな積りで、有り金をすつかり其の錢箱の中へ入れて置いた、すると飛んでもない事に、入れた錢は見る〳〵溶けて流れて川になり、その水が溜つて淵となつた。今の箱川と箱淵とはその時から出來た名前で、先きに杵を投げ出した所が今の杵原だと云つて居る。

血流れ澤

河野村の瀧川を上つて行く途中、泉の湧き出て居る所を血流れ澤と云ふ。昔大蛇が城に戰爭のあつた時、武田方の軍勢は川を渡つて度々織田の陣に夜討ちを仕かけ、その都度山の上よ

り轉がし落す大木大石に壓しつぶされて、此のあたりは血が河をなして流れたそうである、その谷で討死をした兵士(つわもの)たちの魂が今でも其處らに迷つて居るのか、川の水には血が混つて流れると云ふ。

矢立て木

大鹿村の矢立て木は昔領主の遠山氏が江戸詰で此の地を通る時、矢を一と筋づゝ其處の木に射立てゝ行くことが例になつて居た。それで今其處を矢立て木と稱んで居る。

御子谷

昔飯田の城主坂西長忠が上飯田の一の瀨に於て小笠原の伏兵に襲はれて戰死した、勝負平の地が卽ちそれである。その時家來の窪田に竹村の二人、長忠の嫡子の二才になるのを抱いて其の塲を遁れ、ひそかに木曾へ落ちようとして途を失ひ、小黑川の端をさ迷つて居る間に子供は餓死してしまつた。二人は已むなくその遺骸を其處に葬つて後山本村の方へ落ちて行つた。今日御子谷と稱んで居るのが卽ち其處で、その附近を迷ひ澤と稱して居る。

辰野と樋口

昔朝日村の荒神山が伊那の東西兩山脉の間を繫いで居た爲めに、諏訪湖は此處まで一ぱいに水を湛えて居つた、そしてその中にヌシの大蛇が住まつて居た。ある年大洪水の折、荒神山の途中が切れて湖水の水は一時に天龍川へ流れ出し、其の跡が次第に涸れてやがて平地にな

つた、そしてヌシの蛇は居所を失くしてそれも此處で死んでしまつた。辰野と云ふ名前はそのために出來たのだと云つて居る。そして荒神山が崩れて水が流れ出した所が今の樋口だと云ふのである。

炭燒長者の話

山にこもる貧乏な青年が、ふとした事から高貴のお姫樣と緣組みをして忽ちに長者になつたと云ふ話は方々にある。所謂炭燒長者の話がそれであつた。そして山の中に住まつて土を堀るのは芋堀りの商買であつたために、炭燒きがたま〳〵芋堀りに變つたものか、此の炭燒長者の話は往々にして芋堀長者の物語にもなつて居る。

次ぎに述べんとする園原の伏屋長者の話と云ふのも矢張り此の炭燒長者の事であつた。そして此の類の長者譚は、東は津輕の果てから西は九州の片隅まで、彼方此方の土地に於て、名前位は多少違つて居ても、殆んど同じやうな筋道で語られて居るのは考へて見ねばならぬ事であつた。

ちよつと例を擧げて見ても、奥州の津輕に於ては炭燒藤太の話となり、山形の寶澤山に傳はる所によれば、炭燒きの名前は矢張り藤太と云つた。福島の地へ入つては吉次の宮と神樣にまで祀られた炭燒き吉次。園原を越えて中國地方へ行けば阿波の糠丸長者、此の話では炭を燒いて居たのは友藏であつた。九州豐後では有名な眞野の長者で、此れは『藁で髮結ふた炭燒き小五郎』と謠にまで唄はれた果報な男であつた。その他名前だけを擧げて見ても、豐後朝倉の炭燒き又吾、大隅の炭燒き五郎藏、肥後は菊池の炭燒き孫三郎、又炭燒きでない者には加賀は金澤の芋堀藤五郎等々、搜したらまだ〳〵澤山にあるかも知れぬ。

これ等はいづれも山のやうな黄金の中に坐りながら其の尊さを知らず、都から來た妻に敎へられて初めてそれを知つたと云ふ、頗る時代ばなれのした物語りであつた。

園原の伏屋長者

智里村園原の入り口に、今は畑地になつて居るが、昔の伏屋長者の屋敷跡と云ふのがあつて、今でも其の頃の庭石だつたと云ふものが殘つて居る。伏屋長者の話はかなり有名で、特に此の園原から御坂峠へかけては、大寶年間に岐蘇が開通になる以前に於ける唯一の官道で、行通の要路にあたつて居た爲めに、數多くの古い物語が傳へられて居る。

炭燒き喜藤治

昔京都の公家何某の息女に、客女姫と云ふお姫様があつた。ある夜の事、日頃念じて居る住吉明神が夢枕に立ち、『信濃の國園原の里に喜藤治と云ふ若者が住んで居る、そなたは今より信濃へ下り、園原へ行つて喜藤治の妻になれ、行く末は大へん仕合はせになるであろう』とのお告げであつた。お姫様は不思議な事に思つたけれども、三晩續けて同じ夢を見たので漸く心に迷ひ初めた。そこで夢のお告げを父母に物語り、やがて遙々と信濃路をさして旅に出かけた。

園原には其の頃出羽の國山本の庄の住人で、井原喜藤左工門の一子喜藤治と云ふ者が、長保五年の春の頃、此の地へ來つて住まひ、炭燒きを其の日の業として居つた。其の貧しい住居

へ都のお姫様が突然に尋ねて來たので、喜藤治の驚きは大へんなものであつた。而し女の方で細々と身の上話しを語り、妻になりに來た仔細を話したので、漸く事の次第が分り、そこで二人は目出度く夫婦になつた。

鶴巻き淵と黄金岩

喜藤治の家は貧乏で、今迄でさへ漸く一人の口過ぎに一ばいであつたのに、新たに妻を迎へたために今では全く其の日の食べ物にも事を缺くやうになつた。それを見た妻は帶の間から小判を取り出し、此れを持つて町へ行き、入り用の品を何でも買つて來なさい、と云ふ。炭を持つて行つてお米に代へる事の外に、おかねの値打ちを更に知らない喜藤治は、こんな物でお米が貰へるかと不思議に思ひながら、その小判を固く握つて駒場の町へ買ひ物に出かけて行く途中、阿智川の岸に沿つて下りて行くと、水が一ぱいに湛へて淵になつて居る所に眞白い鶴が一羽、岩の上に立つて居るのが眼についた。喜藤治は思はず手に持つて居た小判を礫のかはりにして鶴を目がけて投げ付けると、小判は空しく水の中へ沈み、鶴は何處ともなく逃げ去つた。喜藤治は今更どんなに後悔しても追ひ付かず、頗る悄然として家へ歸り、此の旨を妻に語ると、それを聞いて妻が、それは勿體ない事をした、あれは小判と云つて大切な寶だと大へんに惜がるので、喜藤治は少しも合點がゆかず、あんな物なら裏の山へ行けば幾らでもあると大へんな事を云ふ。妻は大いに怪しみ、導かれるまゝに夫について行つて見ると、日頃燒き捨てた炭頭は皆黄金となつて燦然と光り輝やいて居た。黄金の山を見付けた二人は忽ちに長者になつたと云ふのである。

喜藤治が小判を投げた岩が黄金岩で、鶴の居た淵を鶴巻き淵と稱んで居る。

長者免許狀の事

二人の間にはそれから引きつゞいて吉次、吉內、吉六の子が生れ、一家は益々富貴繁昌して行つた。此の事やがて都へ聞えて、康平三年には長者の免許狀を賜はり、伏屋長者と稱ぶやうになつた。

長者免許之事者仍天氣令旨執達如件

康平三年正月朔日

左大辨　政　房（花押）

右少辨　時　定（花押）

信濃國伏屋長者へ

此の所謂長者の免許狀は、年を經てぼろ〳〵にはなつたが、今尙ほ會地村駒場の長岳寺の重寶になつて居る。

源義經が東國へ下向の時、案內者になつた金商（かねうり）の吉次は則はち此の園原の吉次の事であつた、吉六は後に京都へ分家して角倉與一と名乘り、吉內は伍和村の手羅尾に移住して住吉神社を祀り、園原氏の先祖として富み榮へたと云はれて居る。そして伏屋長者は其後大坂へ移り、今の住友家の祖先となつたと傳へられて居る。

朝日松

伏屋長者が愈々都の方へ引つ越す時、秘藏の金の鷄を村の中央の朝日松の根元へ埋めて置いた。毎年正月の元日には此の松の樹の下で鷄の鳴く聲が聞えるそうである。（金鷄の話參照）

守り本尊の藥師如來

都のお姫樣が、喜藤治を尋ねて遙々信濃へ旅立つ時、お母さんが姫に對つて云ふ事に『今日別れゝば、又二度と會ふ時もあるまい、これが一生の分れとなろうも知れぬ、遠い旅路の肌守りに、日頃念じて居る御藥師樣を形見と思つて遣りたいが、此れは家に傳はる秘佛故そうもなるまい』と云ふ。姫は此れに答へて『たとへ御藥師樣は頂かずとも、心さへ誠の道にかなふなら、きつと御慈悲を下さりませう、遠く信濃へ下つてからは、何かを心のたゝ賴りに決めて、御藥師樣を念じませう』斯う云ひ殘して遙々信濃の園原山に喜藤治を訪ねた。

姫が喜藤治の妻になつてから、右の次第を喜藤治に物語ると、喜藤治も早速これに同意して、炭竈の底に殘る黑い固まりを取り出して神棚に祀り、それを御藥師樣の御姿と崇めて信神しようと云ふ事になつた。二人は毎日身を淨めて此の御神體を拜んで居た。二人の眞心が天に

通じてか、或は慈悲の御心が二人を憐れみ給ふてか、ある朝、常の如く二人が額づいて少時く祈願をこめた後、ふと頭を擧げて見ると、今迄の御神體が不思議や金色に輝く藥師如來の御姿に變つて居たので、二人はこれを見て無量の大悲に涙を流して九拜した。伏屋長者が永く尊信して祀つて居た此の藥師如來は、今駒塲の長岳寺に寶物となつて納まつて居る。

はゝき木

園原の古道に近く、御坂神社の手前に當る小山の上に、世に傳へられるはゝき木が聳えて居る。四抱にも餘る檜の古木で、地上四五間の所で昔は數條に岐れて居たものが、今では一本だけが殘つて居る。

傳へ云ふ、昔都より遙々此の園原へ來て喜藤治の妻になつた客女姫も、さすがに都の母が戀

しく、山に日の入る西の方を都と思ひ、心の裡に伏し拜む日が多かつた。或る日、ふと表の方を眺めると、彼方の山懐で母の手招きする姿があり〳〵と見えた、母上か懐しやと驅け寄つて見れば、母と見たのは誤りで、其處には一本の若木が風のまに〳〵技を搖り動かして居るのであつた。それからして此の樹をはゝき木と稱ぶやうになつたのである。

一說に、此のはゝき木は箒木で、遠くより眺めると、一しほ高い梢が箒のやうに深林の中から秀でゝ見えるが、近寄つて見ると、更に何れとも分らないのをはゝき木と云ふのだとも傳へられて居る。

姿見池

御坂神社の下方の路傍に小さな池があるが、此れは昔喜藤治の妻は鏡を持たなかつたので、屢々此の池に己が姿を映して見たと云ひ、それで今此の池を姿見池と稱んで居る。

又別の話に、姫は園原へ來て喜藤治を見た所、喜藤治は炭燒きで大へんに穢いので力を落したが、ふと池の面に映つた自分の姿の、これにも劣らず醜かつたので諦らめて喜藤治の妻になつた。それで池に此の名が出來たのだとも云つて居る。

駒繋ぎの櫻

姿見の池から四五丁の所、畑の畔に櫻の古木があつて、昔の名殘を駒繋ぎの櫻と云ふ名に止めて居る。昔源義經が奥州に下る時、駒を繋いだ所だと傳へられて居る。

附記　園原の炭燒きは喜藤治ではなくて吉次であるとする話も廣く語り傳へられて居る。

此の吉次が卽はち義經と一つしよに奥州へ下つた金賣り吉次だと云ふのである。

金原長者の話　その他

長者の話としてはまだ次ぎのやうなのがある。中箕輪村の上古田に昔金原（かねはら）長者と云ふのがあつた。財寶を山のやうに積んで居たと云ふが、詳しい話は傳はつて居らぬ。今その家敷跡を金原と云ひ、長者の名前を唐澤李之亟と云つたとも傳へられて居る。

又同じ村の富田に萬福長者が一人あつて、諸國の長者と同じやうに寶競べをしたと云ふ話が殘つて居る。此の長者の米倉が一朝にして火を失して燒け失せた。その時の燒け米を埋めたと云ふ米塚が殘つて居て、今でも堀れば燒き米が出て來るそうである。

美和村の非持には駒形の宮が祀られて居るが、昔其處に古比丘長者と云ふのが住んで居た。

その長者が澤山の馬を放して置いたと傳へられる所には、周圍に濠を堀りめぐらした跡が殘つて居る。而し長者の由來については詳しい話は傳はぬ。

巨人の話

塲所によつて名前はちがふが、怪力の大法師や手長、足長、背長（せいたか）の巨人の話は諸國に隨分澤山あつた。ちよつと一例を擧げて見ても、甲州東山梨郡の石森山と塩山とは昔レラボッチが麻がらの棒で擔いで來た山で、丁度此處まで來た時に擔ぎ棒が折れたので、とう〳〵此所の山になつてしまつた、それで此の村では麻を作らない、などゝ云ふ。又上州では怪力の百合若大臣が自分の腕試しに鐵の弓に鐵の矢を番がへ、妙義山へ向つて射てやると、見事

にその矢が山の峰を一つ貫いた。その時に踏んだ力足の跡が山の麓の石の上について居る、左足と右足が五六丁も離れて居たと云ふのだから大へんな事であつた。

デラボッチヤ

此の類の話は擧げれば限りもないが、伊那でも北部の方へ行けば此れをデラボッチヤと名付け、そのデラボッチヤが石の上をとんだと云ふ足跡の類は、中箕輪村にも手良村にもある。いづれも今では沼田になつて居たり又は石の上に大きな足跡がくぼく殘つて、それに雨水などが一ぱいにたまつて居る。

次ぎに述べる尾科豐後の話など、矢張り同じやうな種類の物語りで、今日語り傳へられる豐後岩には豐後がとんだと云ふ足跡や、睾丸の跡がちやんと殘つて居るのだから、決してうそではないのだそうである。

尾科豐後

豐後は龍江村字尾科（をなし）の生れだとも云ひ、又は大坂の生れだとも傳へられて居て判明しない。傳ふる所によると、飯田の脇坂侯に仕へ、勳功によつて高橋豐後守と云ふ名前を殿樣から拜領に及んだと云つて居る。豐後一日殿樣のお供をして城外を歩いて居るうち、川の端に出たが相憎其所に橋がなかつた、そこで豐後は一人で瞬く間に橋を拵へて殿樣をお渡し申したので、殿樣は大いに豐後の働きをお賞めになり、高橋と云ふ苗字を下された。又ある時天龍川が大洪水で、喬木村一帶が今にも押し流されて水の底になりそうな形勢となつた、豐後は其の時大きな竹籤を根こぎにして來て水害を防ぎ止めた。殿樣は豐後の怪力をお賞めになつて豐後守と

云ふ名前を下さつたのだと云つて居る。

とにかく豐後は大へんな怪力であつた。

豐後は龍江村字尾科に住まつて居たから俗に尾科豐後と稱びならはして居る。

豐後が或る日江戸見物を思ひ立ち、旅仕度をして出かけて行くと、折から村に道普請が初まつて居て、大きな岩が一つ、邪魔になるので多勢の人夫が寄つてたかつてワッショ〳〵と動かして居る所へ通りかゝつた。そしてその有樣を見て、丁度芋虫に蟻がたかつたやうだ、と、大口を開いて笑つたから人夫達は承知しない。生意氣を云ふならお前一人で動かして見ろ、と云ふ。そこで豐後は兩手でその岩をひよいと抱へて路端の田圃の中へ投げ込んだ。そして其の足で悠々と江戸見物をすまし、村へ歸つて來て見ると、まだ村中の人たちが寄り集まつて豐後が先に投げ込んだ岩を田圃の中から引き上げて居るのであつた。豐後はそれを見て氣の毒に思ひ、もう一度手を貸して隅の方へ形付けてやつた。

ある年の夏の夕方の事であつた。母親が南瓜棚の下で風呂には入つて居ると、俄かに大雨が降つて來た。豐後は大いそぎで母親がは入つたまゝの風呂桶を抱へて庇の下へ持つて來た。その母親が死ぬまでに是非一度善光寺樣へお參りがしたいと云ふ。親孝行な豐後は、それは容易い事だ、俺が背負つて行つてあげよう、と、其處で豐後は母親を背負ひ、一と村一と跨ぎ程の勢で瞬く間に善光寺へ到着した。さあ善光寺へ來た、お參りなんしよ と、背中から母親を下ろして見ると、可哀相に母親は何時の間にか豐後の背中で搖り殺されて死んで居た。

豐後は繩を綯ふのが大へん自慢であつた。『誰か俺の綯ふ繩の尻を持つて走んて見ろ』と云ふ。日頃豐後の自慢の鼻を一つへし折つてやろうと、一人が豐後の綯ふ繩の尻を持つて後の方へ駈け出すと、豐後はさつさと綯つて行く、繩の尻を持つた男が二里程も先の阿島まで走つて來て、其處の杉の樹へ繩を卷き付ける頃には豐後の後には、綯ひ溜めた繩が積んで山のやうになつて居た。

或る時飯田の城普請が初まつて、籔堀り人足の賦役が當つて來た、豐後が仕事場へ行つた頃にはもう仕事が初まつて居た。此れしきの竹籔なら俺一人で片付けてやろう、と、近くの青竹を一本引き拔き、それを掌（てのひら）で握り碎いて襷にかけた。一同がびつくりして見て居るうち、瞬く間に廣い竹籔を一人で皆引き拔いてしまつた。殿樣は褒美に何なりとも取らせようと云ふと、餅好きの豐後は餅を下さいと所望した。お勝手方が大臼で搗く餅を片端から食べて、とう〳〵一斗の餅を平らげてしまつた。

ある日豐後は阿島樣へ行つて働き、その御褒美に香煎を一斗餘り頂戴した、好きな香煎を一と息に舐めつくし、尾科へ歸つて放屁した、すると食べた香煎が一時に散亂して尾科の空が一めんに曇つた。

豐後のした仕事や惡戯は此の他にも數へつくせぬ程に澤山あつた。時又から淺間の杜まで一里が程を船を曳きずり上げたり、尾科から天龍峽まで大岩を投げたり、四本の足を掴んで牛を差し上げたり、或は又石を運ぶ時、頭の上へ戴せて歩いて石に頭の穴を明けたり、こんな事を一々數へ上げたら限りがなさそうである。

豐後は毎年正月の元日には殿樣の所へ御年始に行き、一斗づゝお雜煮を頂戴するのが例になつて居た。ある年の正月、物好きの男があつて豐後の後（あと）を尾（つ）けて行つて見ると、豐後は途々何か路傍の砂の中へ埋（い）けて行く、何かと思つて堀り出して見ると生大根の切れ端であつた。よせばよいのに其の男は豐後の埋けて行く大根を一つ〳〵堀り出して捨てゝしまつた、豐後は今年も澤山のお雜煮を頂戴しての歸りがけ、途中に埋けた大根を堀つて見ると一つもない。何時でも生大根を途々嚙つて雜煮腹の具合を治ほして來たのを、それが出來なかつた爲めにとう〳〵豐後は死んでしまつた。

今日豐後の記念としては豐後岩が尾科に殘つて居る。

土中誕生の話

市田村大島山の花立には、頭白上人の語なとで有名な土中誕生の話が傳はつて居る。

昔産月に近い若い女が不圖した病氣が因で亡くなつた。親類や縁者たちが集まつて懇ろにゴサンメイ（餓鬼坂）の墓地へ葬つてやつた。手向けの花の赤や白やが新らしい土饅頭の周圍に咲き亂れて居つた。

その頃、其の墓地の附近に一軒の餅屋があつた、爺さんが毎晩店に寂しく番をして居ると、若い女が餅を買ひに來る、それが毎晩同し時刻に同じ女が、いつでも同じやうに餅を買つて何處へともなく歸つて行くのを爺さんは不思議な事に思つて居た。而かもその度毎にいつでも六道錢を置いて行くので爺さんは愈々怪しく思ひ、ある晩女の後を尾けて行つて見ると、女は淋しい夜道をとぼ〳〵と墓地の方へ歩いて行つて、新しい土饅頭のあたりでふつと消えてしまつた。爺さんはびつくりして逃げ歸つた。

翌朝大勢の人たちを誘つて其の墓場へ行つて見ると、土の中から赤兒の泣く聲が聞える、不思議に思つて堀り返すと、土饅頭に突き差した節抜きの天蓋の竹が深く穴の中に通じて、死んだ母親の膝に抱かれて、生れたばかりの赤兒が泣いて居た。竹の穴から裟婆の風が通つて赤兒は健やかに育つて居た。餅を毎夜買ひに來たのは死んだ母親の魂であつた。

村の人達はこの不思議に驚き、赤兒を瑠璃寺の和尚樣に托して育てゝ貰ふことにした。天蓋の竹の節を抜くことはこれからして初まつたと云つて居る。

死んで墓場へ葬られた母親から赤兒が生れて、土の中で泣いて居たと云ふ此の類の話は、想像もつかない程に不思議な事のやうであるが、それが又我が國に於て各所に多く語り傳へられ

て居る所であつた。話の例を一つ二つ擧げて見れば、常陸國筑波山の東光寺住職頭白上人は、土の中に五年の間も母の幽靈に育てられて居たと云ひ、それ故に生れながら髪の毛が白く、肌まで雪のやうであつた、と云ひ、伊豫の國西宇和郡龍譚寺の名僧幽靈和尚も亦此の類であつて、此の和尚は土の中で母の幽靈に飴をなめさせられて生きて居たと云ふのであつた。丹波の國永澤寺の開山寂靈和尚は、まだ母の胎内に居るうちに母が死んだ。京都清水の觀音堂の側へ埋めて置いた所、土の中で赤兒の泣く聲がするのを通行の人たちが聞きとがめ、堀つて見たらば子が生れて居つた、よつて叡山へ上らせて僧にしたと云ふのが卽はち此れであつた。

斯うして見ると、土の中から生れたと云ふ子供は長じて多く高德の僧になつて居るやうであるが、而し必ずしもそうばかりではなかつた。貝原益軒の本に出て居る穴兒の話などは、土の中から生れるには生れたが、根つから豪くなつた樣子もないし、おまけに此れによれば死んだ母親も共に生き返へつて居たと云ふから大へんに目出度い話である。前に述べた大島山の穴兒なども、瑠璃寺へ預けて僧にしたと云ふだけで、その後は何の音沙汰もなくなつて居る。

鎌倉權五郎と片目のいもり

鎌倉權五郎は八幡太郎の家來で、十六歳の時奥州の戰場に於て敵のために片方の眼を射られながら、その矢も拔かぬ先に矢を射返へして、當の敵を討ち取つたと云ふ勇士であつた。この事だけは大へんに有名な話になつて居るが、其の後の權五郎がどうなつたかは傳へる人がまことに稀である。そのかはりに權五郎が傷ついた眼を洗つたと云ふ池は國中到る所にあつて、而かも其の池に住む魚は大てい片眼であつた。上鄕村南條の田中八幡の境内の恨みの池も

矢張り權五郎が來て眼を洗つたと云ふ池で、其所に住むいもりはいづれも片眼であつた。奥州の戰爭で眼を射られた權五郎は、傷ついた身で諸國を經巡つた末に上鄕村雲彩寺へ辿り着いた。和尙の情で寺の一と間を借り受け、其所で靜かに病を養ふことになつた。權五郎は其所から程近い田中八幡へ毎日杖を曳いて、杉の木の根本から湧き出る淸水に痛む眼を洗つて、只管に全快の祈願を籠めた。

神苑に湧く靈泉の効能と、有難い神樣の加護とによつて權五郎の眼は程なく全快した。權五郎は遂いに此の地に土着して一生を雲彩寺に終つた、と云ふのが此の地に傳はる權五郎の話の筋であつた。そして其の眼を洗つたと云ふ池は恨みの池と稱ばれて今以つて境內に保存せられて居る。

鈴虫の名所お蝶樣

東春近村字洞部落のお蝶樣は名高い鈴虫の名所で、此所の鈴虫は他所のと比べて大へんに聲がよいと云ふので大事にされて居る。そのお蝶樣の話と云ふのは斯うである。

鎌倉の頃と云ふからして遠い昔の話である。京の都の何がしの公卿に長姫と云ふ幼い姫君があつた。早くして母を亡くした長姫に此の頃又二度目の母が來た。而しそれは長姫にとつては決して良い母ではなかつた。長姫は情なき母の苛責に泣き明かす日が多かつた。母は繼の子の長姫を憎み、果てはひそかに企んで長姫を殺そうとまで考へた。長姫の乳母のお蝶樣は幼い長姫の身の上を氣遣ひ、ある夜ひそかに長姫を抱いて邸を逃れ出た。何所へ行くと云ふ當てのない二人にはそれからが長い苦しい旅であつた。二人は東路の方へ志して美濃より御坂峠を越した。か弱い女の足で峠の旅は辛かつた。二人が飯田を經て上伊那郡の東春近村あ

たりへ辿り着いた頃、長い旅路の艱難に疲れ果てた長姫の幼い躰は、乳母の抱く温い兩手の中に埋れたままで再び返らぬ人となつて居た。此の時長姫の可愛い手の中に握られて居た可憐の鈴虫が野に放たれて、今日までの長い月日の間を昔ながらの美くしい音に鳴いて居ると云ふのである。姫を亡くしたお蝶様は、此所に姫の菩提を弔ひつゝ哀れにも美くしい一生を終へた。村の人たちはお蝶様の心を愛でゝ神様に祀つた。今日でもお蝶様のあたり、秋になると鈴虫の聲が此處のみは殊更に美くしく聞えるそうである。

戸倉山の婆

赤穂村の東に當り、天龍川を隔てゝ聳ゆる山が伊那里村の戸倉山で、一名伊那富士と稱ばれて居る。其の山の頂に近く、昔大きな池があつて、其の畔に戸倉山の婆は一匹の犬を相手に住まつて居た。婆の素性に就ては知る人が一人もなかつたけれど、とにかく年老いた一人の婆が、深い山の頂に怪しく生きて居た事だけは語り傳へられて居る。

戸倉山の婆は犬を使つて高遠の町から入用の品物を何でも取り寄せて暮らして居た。ある年の春の山の口の日に、草刈りに初めて山へ登る百姓たちは戸倉山の麓で山から下りて來た一匹の大きな犬を見付けた、初めはほんの悪戯のつもりであつたのが、どうした機か遂ひ誤つて其の犬を殺してしまつた。それが運悪るくして戸倉山の婆の使ひ犬であつたのである。

犬が殺されてから戸倉山の婆の姿は何處へか消えて失くなつた。山傳ひに他の山へ移つたとも、又は池に身を投げて池のヌシになつたとも、或は又池の畔に住む大きな蛇は婆の化身だとも、噂はいろ〳〵に傳はるけれども、兎に角婆はも早や戸倉山には居なくなつた。その後はどの年も山の口の日になると、きつと戸倉山の婆の涙雨が降る。山の頂上にはお社があつて、

其處には婆に仕へた犬の靈が懇ろに祀られて居る。

狐が落した寶珠の玉

狐の尻尾の先には寶珠の玉が付いて居て、狐がそれを取り落したのを拾つたと云ふ話は諸所にある。

昔高遠の藩士で岡田何がしと云ふ人が、三峰川の端で網を打つて居ると、その近くで一匹の白狐が浮かれて跳ねまわつて居るのを見、そつと近寄つて網を投げ掛けると、狐はびつくりして一目散に逃げ失せた、その跡に光る珠が一つ落ちて居る。拾つて見ると白い毛でふわ〳〵と出來た寶珠の玉であつた、今でも其の家にはそれが寶物になつて藏つてあるそうである。

東筑輪村小河内の何某の家でも、朝玄關へ出て見ると白い毛で包まれた玉が落ちて居た、狐の寶珠の玉だと云つて喜んで寶物にして居たそうである。

鼎村願王寺の和尚が昔庭で拾つたと云ふ寶珠の玉が、今でも寶藏に藏つてあるが、それは兼益浪人に退治せられた白狐の尾にあつた玉だと云はれて居る。

此の白狐退治については次ぎのやうな話が殘つて居る。

むかし筑前の浪人で兼益と云ふ侍が、鼎村萱垣の願王寺へ來て暫らく足を止めて居た。兼益は琵琶の名人で毎日椽側へ出て琵琶を彈いて樂んで居た。その頃願王寺の森には狐の古巣があつた、夜になると出て來て畠を荒し、鷄を盜み、時には入道などに化けて百姓たちの膳玉を潰した。百姓たちはそこで相談をして狐退治を願王寺のお侍樣にたのむ事になつた。

兼益は今夜もよい月の下で琵琶を彈いて居ると、白狐は奇麗な娘に化けてやつて來た、そして琵琶の音に聞き惚れたやうな樣子でだん〳〵と椽先き近くへ寄つて來た。兼益は月に浮れ

た狐の隙を見て不意に女へ切り付けると、女の姿はぱつと消えて、森のあたりに立ち上る黒雲の中に稲妻の光るのが見えた。兼益は刀を拔いて森の中へ狐を追つて行つた。

狐退治がすむと雲も稲妻も間もなく靜まつた。百姓たちが喜んでお禮を申し上げながら歸ろうとすると、向ふの丘の上を松明の行列がちら〳〵と長く續いて、やがてそれがぱつたり消えると、その方角で人を葬るちんぼんぢやらんの音が聞える。

その夜も明けて次ぎの朝、百姓たちが行つて見ると、澤山の小さい足跡に踏み荒された丘の上に怪しい土饅頭が一つ、怖る〳〵堀り返へして見ると何百年もの劫を經た白狐の死骸が現はれた。

寺の坊樣はその朝垣根の下で不思議な珠を拾つた、それは白狐の尾の先きに付いて居た寶珠の玉にちがひないと云ふのであつた。

光國和尙の守り刀

むかし神原村坂部の瑞光院に光國和尙の守り刀と云はれた靈劍があつた。狐憑きの者一たびこれを頂けば狐は立ち所に退散し、夜泣きする兒の枕元に一と晩これを置けば夜泣きが止むと云はれて居つた。惜しい事にその刀、寺の小僧に持ち逃げせられて今はない。

昔坂部の地頭熊谷直光と云ふ者が仔細あつて浪人の山伏を切り殺した。程なく又家來の右衛門三郎と云ふ者、大罪を犯した咎によつてこれを右衛門淵に沈めた。その後その二人の死靈が祟つていろ〳〵の禍をしたので、三河國の善智識光國和尙に祈禱をたのんだ所惡靈は悉く退散してしまつた。此の地に暫らく足を止めた光國利尙が、やがて此所を去る時に、形見のしるしに直光に遺したのがこの相州三原の正宗の短刀だと云はれる。

寶刀青蛇丸の話

生田村峠區の村社白諏神社の寶物に一振の名劍がある。昔遠山土佐守が武運長久を祈る爲めに寄進したものだと云はれ青蛇丸と名付けられて居る。その青蛇丸には次ぎのやうな話が殘つて居る。

昔その神社の神主が其の寶刀を腰に差して隣り村まで行く途中、厠へ入ると云つて腰から其の刀を拔き取り、路傍の木の枝に懸けたまゝ忘れてしまつて幾日も經つた。名刀は空しく木の枝にぶら下つたまゝでは居なかつた。やがて名刀の精が現はれて丈にも餘る大蛇になつた。通りかゝつた百姓が路傍の樹の上に蟠る大蛇を見て膽をつぶして逃げて來てから、大蛇の話は村中の評判になつた。神主はそれを聞き、胸の中に思ひ當ることがあるので恐る〳〵噂の

場所へ行つて見ると、樹の枝に紛ふ方なき神社の寶刀が、先きに自分が懸けた通りの姿のまゝで懸つて居た。神官は全く畏れ入つて早速その寶刀を取り下ろし、お宮に納め奉つてから大蛇の姿は見えなくなつた。寶刀は長さ一尺一寸、青蛇丸と稱ばれて今でも白諏神社の寶物になつて居る。

瑠璃寺の青獅子

市田村大島山の瑠璃寺には青獅子が藏つてある、一名雨乞ひ獅子と稱ばれ、いつの時でも此の青獅子が出れば必ず雨が降ると信ぜられて居る。

昔大ひでりの年があつた。百姓たちは打ち揃つて山奥の不動瀧へ雨乞ひに上り、鉦大皷を打

ち鳴らし、雨乞ひのお經を讀んで大へんな騒ぎであつた。稍々暫くして瀧壺を見ると水の底に青い物が沈んで居る。大勢かゝつて引き上げて見ると立派な青色の獅子頭であつた。雨乞ひの祈りが天に通じたかと喜び勇んだ若い衆が、その獅子頭を擔いで一と舞ひ舞つたかと思ふと、忽ちの間に大雨が車軸を流して降り出した。百姓たちは狂氣のやうに喜んで、瀧津瀬のやうな雨の中をその獅子頭を被つて山を舞ひ下りた。

青獅子はそのまゝ瑠璃寺に納まつて今でも寶物になつて居る。瑠璃寺の青獅子が出ればさつと雨が降ると、今でも多くの人たちは云つて居る。

飯田烏

寛文の昔、堀様が脇坂侯に代つて下野の烏山から飯田へお乘り込みと云ふ事になつた。堀様は慈悲深いお方で、空を飛ぶ鳥、野を走る獸たちに至るまで、皆その德に懷いて居た爲めに、いよ〳〵飯田へお國替と云ふ事に決まると第一番に烏たちが騒ぎ出した。早速お宮の杉の樹の上で寄り合ひを開いて相談をした所、何はさて措き多年御恩を受けたお殿樣が慕はしいと云ふので、一つそのこと、行列のお供をして一緒に信州へ引つ越そうと云ふ事に相談がまとまつた。

いよ〳〵其の日になると、烏山の烏たちは老若男女手に手を執つて、住み馴れた烏山を後にして信濃路さして出發した。鋏箱に大烏毛、下に居ろ、下に居ろ、の行列の上を後になり先きになりして漸く飯田へ到着した。飯田にそれまで居なかつた眞つ黑助の烏の一と群れは、いよ〳〵お城の森の樹の上へ巢を喰つて、朝は早くよりカア〳〵啼くようになつた。今の飯田の烏は此の時烏山から來たものゝ子孫だそうである。

お城の森で眞黑烏がカア〳〵啼くようになつて、第一に迷惑をしたのは泥田の田螺であつた。春先きになつて田の水が温むと、泥の中から悠然と罷り出て、呑氣に田の中を遊んで歩くのを烏たちは喜んで啄いて食べた。田螺はびつくりして泥の中へもぐつてそれきり出て來ない。

ツボどの、ツボどの
お彼岸參りに來やせんか
いやだ、いやだ
烏と云ふ黑烏が
足をつゝき　眼をつゝき
それでわしや參らぬわいな

春が來て菜種の花が咲くと、泥田の上へ彼岸參りに出て來た田螺も、それからはこんな歌を唄つて泥の中から出て來ないようになつてしまつた。

餅搗かぬ家

三穗村の伊豆木に維新の頃まで正月に餅を搗かぬ家があつた。それは何がしと云ふ其の頃土地一番の金持の家で、澤山の田地田畑と、それを耕す奴僕小者は幾人と云ふ數も知れぬ程であつた。

ある年の暮れの餅搗きの日の事であつた。廣い庭に大勢の男女がそれ〴〵の仕事に忙しく立ち働らいて居た時に、思はぬ珍事が出來した。釜焚きの女が釜に湯のなくなつたのに氣が付かず、火を焚きつゞけたために大釜は大きな音をして割れた。その家の主人は此れを見て大へんに立腹し、女を捕へて竈の中へ蹴込んだ。人々が驚いて火の中から助け出した時には女は

既に綷切れて居た。目出度い筈の餅搗きも、こんな不吉な出來事で終りを告げてしまつた。

一年が過ぎて又餅搗きの年の暮れになつた。其の家では今年も廣い庭に大勢集まつて餅搗きの仕事に取りかゝつた。すると不思議や火に懸つた大釜の中から怪しい呻き聲が起つて人々を驚かした。去年の不吉を思ひ出した人たちが、怖わ〳〵他の釜と取り替へてみても、呻き聲の聞える事は同じであつた。常には何事もない釜が、餅搗きの今日に限つて鳴ると云ふのが人々を一層恐れさした。不思議はたゞそれのみに止まらなかつた。何がしの一族の者の家の釜は皆一やうに餅搗きの日になると鳴り始めた。それ以來、その一族では怖れて正月の餅を搗かぬことにした。

その事のあつて暫らくの後、さしもの富に誇つて居た何がしの一族には不幸ばかりが打ち續いた。そして家運と共に次第に滅びて行つた。維新の頃まで餅搗かぬ家が其の一族の中にまだ殘つて居たそうである。

高粱を作らぬ家

百姓一揆のために殁落した遠山家の一族は、傳手を求めて四方へ落ち延びて行つたが、そのうちに一人、山本村の箱川に隱れて其處に住まひ、土地を開いて其處に小さな部落をこしらへた。そのうちに住む遠山の一族では今でも高粱を作らない。それは遠山土佐守が高粱畑で殺された爲めに、遠山家では特に高粱を忌み、作れば必ず祟りがあると云はれるからだと傳へられて居る。

二つ山と嫁入りの話

伊賀良村と山本村との境、縣道を横に見て同じ形の山が二つ並んで居るのが恨の山、通稱二つ山である。昔から此處を通つて嫁入りした者は必ず不緣になると云はれ、わざ〳〵遠路を廻つて行つたそうである。弘化の年、村の何がしが三州伊良湖の歌人の磯丸に

千代かけてかはらぬ中の夫婦山
いつの世にかは契りそめけん

と云ふ一首の和歌を貰つて來て、石に刻んで路傍に立てゝから、凶變じて吉となり、其の後は此處を嫁入りして行つても何事もなくなつたそうである。

眞菰が池の鴛鴦の話

此の池の鴛鴦についてはいろ〳〵に違つた話が傳はつて居る。

その一

富縣村の貝沼に鴛鴦山東光寺と云ふ寺があつて、そのお寺の下の小さな池を眞菰が池と稱ぶ。此處にも椀貸の話があつて、村の人たちは大へんに有難がつて居た。借用を申し込む人は必ずその家の主人で、而かも紋付の羽織を着用して行かねばならぬことになつて居た。　或る時村の一人が此の池から入用の品物を借り、それを返へす時に粗そうして花蓋を一枚こわつてしまつた。よくお詫びでもして返せばよかつたものを、その人は碌にお禮もお詫びもせず

に返してしまつたので、その後は誰が何と賴んでも貸して呉れなくなつた。村の人たちはその男の仕打ちを憎んで見たものゝ、今更如何とも仕やうがなかつた。

然るに其の事のあつた日から、一羽の鴛鴦が其の男の家の屋根へ來て『花蓋返せ、花蓋返せ』と悲しそうに啼きながら舞つて居る。雨が降つても風が吹いても、その鴛鴦は毎日缺かさず其の家の屋根の上へ來ては啼いて居た。今日も亦屋根の上へ來て『花蓋返せ、花蓋返せ』と啼いて居る。男はそれを見て五月蠅いとでも思つたか、鐵砲を取り出して來てその鴛鴦を擊つてしまつた。所が不思議な事に其の頭だけは何處かへ飛んで行つて、落ちて來たのは躰ばかりであつた。

それからしてはその家には好い事はなかつた。妻が亡くなる、子供が死ぬ、家運は日に〳〵かたむくばかりであつた。そして一年が經つた。

その男は吾が身の不仕合せは眞菰が池に殘る一羽の鴛鴦の仕業だと思ふやうになつた。そこで或る日、鐵砲を提げて眞菰が池へ行つて見ると、そこには連れを失つた鴛鴦が一羽寂しそうに浮いて居た。男はとう〳〵その鴛鴦をも擊つてしまつた、そして其の死骸を拾つて見ると其の翼の下に去年擊つた鴛鴦の首がしつかりと抱へられて居た。その男も强情な性ではあつたが、それを見て何となく悲しくなつた。數へて見れば月も同じ、日も同じ、丁度まる一年の後の出來事であつた。不思議な因緣に漸く氣付いたその男は初めて悔恨の涙に暮れた。

それからして間もなく、頭を圓め墨染の衣を着た男の姿が村から去つて行くのが見られた。殺した二羽の鴛鴦の菩提を弔ふために、そして亡き妻や子の後世の安穩を祈るために漂浪の旅に立つて行くのであつた。

その事があつてからもう久しい月日が流れた。眞菰が池も次第に淺くなつて、昔の面影もなくなる程に長い日が經つた。鴛鴦の話も村人の記憶から漸く忘れられて行くやうになつた頃、面やつれした旅僧が一人、何處からともなく此の村へは入つて來た。そして眞菰が池の端に立

つた時には涙が兩頰に傳つて流れて居た。旅僧は此處に小さな寺を營んで念佛三昧に寂しい一生を終へた。今日貝沼の鴛鴦山東光寺は卽ちその旅僧の建てたお寺である。

その二

昔武田家の家來で櫻井重久と云ふ者が、主家滅亡の後此の地へ來て住まひ、貝沼重久と稱して居た。ある日狩に出で、眞菰が池に交いの鴛鴦の遊んで居るのを見付け、手にした弓でその雄鳥の首を射て殺した、重久は鳥の首を見失つて怪みながら、そのまゝに家へ持つて歸つて來た。

それからして二三日の後のことであつた。ある日門口(かどぐち)に當つて美くしい女の聲が聞えた。

櫻井の名もうらめしき貝沼の
眞菰が池にのこるおもかげ

日暮れなばいざと誘ひし貝沼の
眞菰が池に鴛鴦(おし)のひとり寢

歌の聲はほそ〳〵と續いて訴へるやうに悲しかつた。重久は座を立つて表へ出て見ると、女の姿は見えず、外はたゞ青々とした草が靜かに風に戰いで居るのみであつた。女の聲はそれから後も幾度か門口を訪づれた。

知らぬ間に早や一年が經つた。去年と丁度同じ日のことであつた。眞菰が池の水の面は靜かに小波を浮べて、葭の間には今日も一羽の鴛鴦が眠つて居る。重久は再び弓を執つてその鴛鴦を射殺した。そしてその死骸を調べて見たら無慘や去年殺した雄鳥の首と覺しいのを其の翼の下に抱いて居た。それを見た重久は弓を拋つて暫らくは呆然として佇んで居た。幾度か門口に訪れた女の歌の聲が新たに心の底に甦つて、涙は止めどもなく頰を流れた。重久茲に於て大悟し、荒れ廢れた東光寺を再建して寺號を鴛鴦山と改め、自らも弓矢を捨てゝ草庵を此

處に結び、ひたすら供養に怠りがなかつたと云ふ。

狗賓に浚はれた稚兒の話

市田村大島山の御藥師樣のお開帳と云へば當時の大祭の一つで、此處では早くから獅子舞ひが催され、特に稚兒の舞は評判で、近鄕から押し寄せて來る參詣人の中には此の二つを見るのを當ての人が多かつた。

ある年の祭の日の事であつた。今日も大勢の稚兒たちが美しく着飾つて、高く拵らへた舞台の上で笛大鼓の囃子につれて面白い舞の最中であつた。舞台を圍む幾百人の見物は夢中になつて此の奇麗な舞に見惚れて居ると、折から怪しい風が一と吹き幕を吹き上げたかと見る間

に、忽ち現はれた狗賓樣が、中で一番美しい稚兒を一人搔き浚つて飛んで行つた。

不意の出來事に膽を潰した人々が、漸く我れに歸つて向ふを見ると、山の中腹の雲の中に一寸その姿が見えたと云ふが、それなり何所へか姿を消してしまつたそうである。稚兒の舞はその年限りで止めになつた。村の人たちは可哀相な稚兒の亡き魂を神樣にして祀つて居る。

村の端れの茅ヶ原に稚兒石と稱ぶのがあるが、それは稚兒を浚つた狗賓樣が休んだ所だと云ふ。雨のじめ〳〵と降る日に大根おろしを磨つてその石にかけると、血が滲(にじ)んで出るなどゝも云つて居る。

石屋さ駒場

昔の子供たちは手頃な石を持つて門前の大きな石をカチン〳〵と叩きながら

石屋さ駒場　穴堀つて通れ

と唄ふ。コン〳〵石と稱んだのがそれであつた。供養塔の台石や、石垣の角石などに、斯うやつて拵らへた子供たちの小さい努力の跡が、丸い可愛らしい穴になつて幾つも殘つて居る。『石屋さ駒場』の代りに『石々駒場』とも云はれた。その唄の由來として傳へられるのは次ぎのやうである。

今の駒場には昔逢地の關所があつて、其處の關守たちは御上を笠に着て矢鱈に通行の旅人たちを苦めた。その當時の惡い習慣が宿場にまでも及んで、通りがゝりの旅人に何の彼のと難題を吹きかけた。それで關の駒場の意地惡る者、と云ふ評判が自然に高くなり、一と口に『意地惡る駒場』と云ふやうになつた。關所を通る旅人は、こんな意地惡る駒場で非道い目に會ふよりは、いつその事土龍（もぐら）のやうに地の中へ穴でも堀つて通る方がましだと云つて

意地惡る駒場　穴堀つて通れ

と云ふ唄が出來た。それが其の後『石割る駒場』となり、再び變つて『石屋さ駒場』『石々駒場』になつたと云ふのである

大蛇退治の話

西箕輪村の大萱に大蛇が住むとの噂が高かつた。高遠の藩士で伊深何がしと云ふ者、此れを聞いて大蛇退治を思ひ立ち、ある日大刀を提げて噂の所へ來て見ると、聞きしに勝る大蛇が叢の中に眠つて居るのが見付かつた。伊深は豪勇の侍であつたから一刀の下にその首を斬り落とすと、天地が忽ち震動して其の首が伊深を目がけて追つて來る。伊深は其處に踏み止まつて再びその首に斬り付けたが、蛇の毒にあてられて其のまゝ其處に昏倒してしまつたと云

ふ。此れは天正頃の話の由である。

東箕輪村の小河内に何がしと云ふ侍があつた。或日家來を連れて天龍川に鵜飼ひに行つた所、何故か其の夜に限つて鵜がすゝまない。侍は不思議に思ひ、松明を振りかざしてよく見ると、鏡のやうな眼をした大蛇が侍を一と呑みと覘つて居た。侍は直ぐに大刀を拔いて大蛇の頭に斬り付けると、蛇は更に屈する樣子もなく進んで來る。其處で侍は手にした松明を火のまゝ大蛇の口中に突き込んでやると、大蛇は暗闇の水の中で大へんに苦しむ樣子であつた。次ぎの朝行つて見ると、下流の三日町の天龍河原に昨夜殺された大蛇の死骸がかゝつて居た、口邊に長い髯の生へた大きなものであつたそうである。

殺された大蛇の崇り

豐村に昔一人の獵師があつた。毎日鐵砲を肩にして昨日は東、今日は西と、毎日山奥を彼方此方と狩り暮らすのが仕事であつた。

ある日、いつもの通り山奥深く上つて行くと、俄に空が搔き曇つて四方が見る〳〵うちに暗くなつて來る、まだ日の暮れる時刻でないのに不思議なことゝ思ひながら、樹陰に立ち寄り焚き火をしつゝ一と休みして居ると雨がぽつり〳〵と降つて來た。すると獵犬が何を見付けたのか俄に騷いで獵師の足の下にもぐり込む、引き出せば悲しがつて逃げまわる。獵師は不思議に思ひながら紐を解いて放してやると犬は喜んで一目散に逃げ去つた。

間もなく頭上の樹の枝でたゞならぬ音を聞いた。獵師が仰いで見ると今しも鎌首を上げた大蛇が焰のやうな舌を吐きながら、獲物を覘つて居るのが見えた。獵師は少しも噪ぐ色なく、豫て用意した鐵の彈丸を込めて覘ひをつけた、銃聲が響いて彈丸はたしかに手應へがあつた、百雷の落ちる樣な音と共に黑い雲が谷一ぱいに廣がつて、大蛇の姿は何所へか消えて行つ

た。

獵師は家へ歸つても其の日の出來事を誰にも話さなんだ。それから暫くして獵師は重い病氣に罹つた、到底助からないと思つた頃、夢の中に獵師は『蛇が來る　蛇が來る』と叫びつゞけた、『峠で殺した蛇が來る、俺はその蛇に生命を取られるのだ』と云つて、初めて先きの日の出來事を物語つた。

獵師は蛇に責められて遂ひに亡くなつた。村中總出をしてその峠の奥へ上つて見ると、鐵の毒に肉が爛れて骨ばかりになつた大蛇の死骸が谷の間に横たつて居るのを發見した。

その峠を今は蛇峠と稱んで居る。その蛇の骨を削つて飲めば如何な難病でも治ると云つて、大切に藏つて居る家が今でもある。

言ひ習はし

手毬唄

言ひ習はし

昔から言ひ習はしと云ふことは何處の土地へ行つてもあつた。そしてそれの發生するに至つた譯もいろ〳〵あつたであろうし、又それを利用した方面もかなり廣かつたやうである。大方は理由のない事が多いやうであるが、而しそれは當時の世間一般の人たちによつて最も多く語られ、又廣く信ぜられても居たものであつた。序ながら少しばかり記して置く。

猫が耳をこすれば其の日は天氣

蜘蛛が太い網を張れば晴天

縄を圍爐裡で焚くと泥棒が入つた時に神様が縛つて下さらぬ

みゝずが地面を這ふのは雨天の兆

蛇が木に上ると雨が降る

下駄を投げて表が出れば明日は天氣

樹の上で青蛙が鳴くと雨

夕やけは天氣　朝やけは雨

子供が茶を飲むと風が吹く

蜂が高い所へ巣をかける年は大風が吹かぬ

鍋の尻が燒けると明日は天氣

鼠が急に居なくなると火事がある

鷄が夜啼きをすると火難がある

禪が下れば雨が降る

子供が騒げば雨が降る

蟻が巣を移すと雨が降る

ボケの花を庭へ植えると火事になる

卷き〳〵石を家へ入れると火事になる

燕を捕ると火に祟る

火柱が立つと倒れた方に火事がある

蜂が家に巣をかけた年は火事に會はぬ

竹に實の生るのは凶年の兆

雪は豐年の兆

朝藤夜縄　朝は藤を焚かず　夜は縄を焚かず

背中合はせ（同じ家から同じ日に反對の方角へ人が出て泊る事）は災難に會ふ

燕を殺すと運が惡くなる

燕が來ぬようになると其の家は貧乏になる

丙午の女は夫を食ひ殺す

うとう年（舊暦一年の間に節分のない年）に結婚すると子が生れぬ

朝茶を飲めば其の日の災難を遁れる

朝梅の漬けたのを食べると災難に會はぬ

水の中へ小便をすると眼が潰れる

茗荷を食べると物覺えが惡くなる

雜煮を食べた茶椀で湯を呑むと公事（くじ）（訟訴）に負ける

お惠比壽樣へ上げた物を食べると緣が遠くなる

赤飯に茶をかけて食べると嫁入りの日に雨が降る

夕方隱れん坊をすると魔にかくされる

頰白の巢を取ると　親死ね子死ね　御蠶樣は味噌になれと云つて鳴く

蚯蚓に小便をかけると陰莖が曲がる

子供が火いぢりをすると寢小便をする

雷の鳴る時桑原〳〵と云ふと落ちぬ

夕立樣の鳴る時腹を出せばお臍を取られる

お臍の垢を取ると力が拔ける

握り飯の落ちたのを食べると怪我をする

双物を跨ぐと怪我をする

双物をかまどの上へ置くと怪我をする

箸と箸とではさみ合ふことを忌む

木の箸と竹の箸ではさんではいかぬ（骨拾ひの時に使ふから）

園爐裡の火を兩方から吹くと勝ち負けがある

朝の蜘蛛は緣喜がよいと云つて袂に入れ　夜の蜘蛛は泥棒だと云つて殺す

泥棒に入られた時、その足跡へ灸をすへると泥棒が足を患ふ

藥土瓶の口を北へ向けて煮ると藥が利かぬ

戸間口の敷居の上へ上るのは親の頭の上に上つたも同じ事だ

おくらぶちに傷をつけるのは親の額に傷をつけるのと同じ事だ

燕が來て巢をかけると緣喜がよい

茶柱が立つと緣喜がよい

姙婦が兎を食べると三つ口の子が生まれる

姙婦が火事を見て腹へ手を當てると赤痣の子が生まれる

姙婦が葬式を見て腹へ手を當てると黑痣の子が生まれる

人參の好きな者は助平

ちんちゆう（ちゝれ毛）の女は多情

烏の眞似をするとごきづれ（口邊の腫物）が出來る

げじ〳〵に舐められると禿になる

寒中と土用に灸をすへるものでない

鰯の目玉を食べると魚の目が出來る

雪隱で唾を吐くと齒が痛くなる

飯をこぼして拾はぬと目がつぶれる

寢鳥を捕ると鳥目になる

墓を立派にすると其の家が衰へる
釣竿を跨ぐと魚が釣れない
夜新しい履物を下ろすと狐にばかされる（裏へ鍋墨をつけて置けばよい）
しつけ糸を取らずに着物を着ると狐にだまされる
猫に鏡を見せると魔がさす
杓子で飯櫃の縁を叩くと狐が來る
日があたつて居て雨の降るのは狐の嫁入り
筍を指さしすると筍が腐る
蛇に指さしをすると指が腐る
字を書いた紙を雪隱で使ふと手が上がらぬ
襁褓（むつき）を夜干しすると子供が夜泣きになる

烏蛇に馬糞を投げると何處までも追つて來る
馬糞を踏むとせいが高くなる
ざるを被ると身の丈けが伸びぬ
人に跨がれると背が伸びぬ
食事をして直ぐに寢ると牛になる
人に唾をかけると喉に毛が生へる
食事中に伸びをすると飯粒が骨の間に入る
三りんぼうに建てまへをすると家が倒れる
女が砥石を跨ぐと砥石が割れる
坊主の夢を見ると風を引く
馬の夢を見ると風を引く

火事の夢はよいが魚の夢は悪い

蛇の夢は大吉

悪い夢を見た時『ばく〳〵食つてしまへ』と三度云へば禍を免れる

夜笛を吹くと泥棒が來る

左ぎつちよ（左利き）に器用が多い

上つ齒が拔けたら雨下へ埋け　下つ齒が拔けたら屋根へ上げる

蜂に刺された時後にある石を伏せると毒にあたらぬ

蛇が土藏に居ると其の家は金持ちになる

三毛猫は化ける

釜が鳴れば變事がある

暗闇で飯をこぼさぬやうに食べると長者になる

餅を搗いた日に燒いて食べると骨無し子が生れる

節分の豆を初雷の日に食べると雷樣にうたれぬ

頭の毛を火にくべると氣違ひになる

爪を火にくべると七代貧乏する

爪を炬燵にくべると氣違ひになる

朝園爐裡の火が噴くと其の日には來客がある

朝障子に鳥の影が映ると客が來る

鐵瓶の口でない方で間違つて湯を注がうとした日には來客がある

桑の木の箸や椀で飯を食べると中氣にならぬ

芋汁を食べた椀でそのまゝ湯を呑むと中氣たなる

社日に石の鳥居を七つくゞれば中氣にならぬ

冬至に南瓜を食べると中氣にならぬ
庭に枇杷の木を生やすと病人が絶えぬ
南天が屋根より高くなると其の家に病人が絶えぬ
火鉢の火を濡らすと病人が絶えぬ
枕を投げると頭痛持ちになる
帶を枕にすると長患らひをする
ほゝづきを庭に作ると病人が出來る
葬式の時轉ぶと近いうちに死ぬ
墓からかへる時同じ道を歸ると佛が生き返へる
半夏の日に葱畑へ入ると死ぬ
猫が死人を跨ぐと死人が起きる

柿の木から落ちると三年目に死ぬ
齒の抜けた夢を見ると近親に不幸がある
尺取虫に首のまわりの尺を取られると死ぬ
機を織る夢を見ると親類の者が死ぬ
烏啼きが悪いと人が死ぬ
墓參りの途中で倒れると近いうちに死ぬ
箒で叩かれると三年目に死る
足袋を穿いて寢ると親の死に目に會へぬ
女が髪を洗つた後藁で結んで置かぬと親の死に目に會へぬ
夜爪を切ると親の死に目に會へぬ

手毬唄

子供と女との居る限り、何處の村の果てまで行つても、普ねく唄はれて居たものに手毬唄があつた。此の唄は、手毬を突く柏子に合はせて唄はれる樣になる以前、已に發生して居たものであるからして、澤山の手毬唄の中には、其の起りのかなり古いものもあるわけである。而してそれが全くの手毬唄になり終つてからは、それが常に女と子供の領分に屬して居たために、歌詞が自由自在に變化する事はきはめて容易なことであつた。手毬唄は本來これ程に意味の曖昧なものではなかつた筈なのに、唄ひ手の智識は頗る不確實なものであつた、その上にたゞ唄ふのみの歌とちがひ、毬を突く方が主であつて、唄はたゞその動作を助けて行く一つの方便であつた。單調きはまる毬突きの動作を、此の唄によつて複雜化して、そし

て其の興味を長く引きずつて行かうとする女や子供達の遊戯であつたために、歌詞が勝手に意味の不明に陷るに至つたことは寧ろ當然な成り行きであつたと思はれる。

而して、昔は斯うした唄の運搬者がかなり多くあつたと見えることは、似寄りの文句の數章を、破片のまゝに其の中に織り込んだ同じやうな唄が、意味の曖昧なまゝに各地に數多く散在して居るのを見ても知れる事であつた。此れ等似寄りのいろ〳〵の手毬唄の中にて、特に目立つて感ぜられるのは、その多くが歌の未尾に至つて特に意味が支離滅裂となり、益々曖昧の度を加へて居ることである。これは、歌は已に唄ひ終つても毬は依然として尙ほ突きつゞけて居るやうな時に、自然に隨意の補足が心要となつたやうな場合とか、或は歌の文句はまだ殘つて居ても、突き手が疲れて、早く一貫貸したくなつたやうな場合等、いろ〳〵の原因があつたことゝ思はれる。次ぎに掲げる幾つかの唄の中で、『井筒屋お駒』とでも名付けられる一つだけは、口說きの形を取つて終始ほゞ意味が一貫して居る特殊の一例であるが、

此れなどは比較的發生の新しいものであるかも知れないと思ふ。

手毬を突く遊戯が次第に他の遊びに代つて行く今日に於て、特に此の種の唄が女や子供の領分に屬して居るものであるために、そして其の歌詞の內容に極めて不明瞭なものが多い等の点よりして、やがて此れ等の手毬唄は全く忘れられてしまふやうになる運命を持つものと思はれる。

手毬唄は各地各村に、若干の變化を持つて其の數がかなり多數に上つて居る。此處では其の中で比較的に他と關係の多くありそうな唄の幾つかと、そして此の地に特殊なものゝ一二を拾ひ上げて見ることにした。

○

おようようようけん町の
親は八郎兵衛子は長太郎兵衛
ちよいと咲いたる茶の木のもとで
お初この頃氣色がわるい
醫者を呼ぼうか　てんしやを呼ぼか
醫者もてんしやも御儉約なさる
明日は髪結ふて御寺へ參る
お寺ついでに名古屋へ寄つて
五兩で帶買つて三兩でくけて
くけ目くけ目にくけ房さげて
折り目折り目に折り房さげて
村の祭に結んで出たら
村の若い衆に抱きとめられて
およしお離し帶切れますに
帶の切れたは結べもしよが
緣の切れたは結ばれぬ　結ばれぬ

○

日かげ待ち〳〵日なたへ向けば
向ふ問屋の一人のむすこ
年は二十一　その名は吉三
吉三腰元にお仙と云ふて
紅やお白粉　櫛簪を
紙につゝんで窓から投げる
窓ぢやとらまい　取らせもすまい
裏の障子をさらりと開けりや

雨が降ります七十五日
雪が降ります八十五日
水が出た〳〵裏町街道
船を浮かべてお仙を乘せて
船のぐるらへ石菖を植えて
石菖咲く〳〵お仙は孕む
若しもその子が女の子なら
菰にくるんで河原へ捨てる
もしも其の子が男の子なら
金の屏風をさらりと立てゝ
銀の團扇であをいで呉れる

三一〇

五つ六つから髪結ふて呉れて
七つ八つからお寺へ上げる
お寺きらひて博奕が好きで
梯子段から突き落されて
一兩三分の紙入よなくし
誰が拾うたと詮議をしたら
わしの姉さま燒餅好きで
米の燒餅二十四五燒いて
宵に九つ夜明けに七つ
一つ殘して袂へ入れて
馬に乘るとてすゝんと落し
降りて拾ふも恥かしや　恥かしや

○

こん〳〵こんさの嫁入りで
嫁に行つたら出て來んな
朝は起きたら
九十九枚の戸を開けて
雨戸の明りで顏あらい
てん〳〵手拭で顏拭いて
ちやん〳〵茶釜で茶を沸かし
爺さん婆さん起きなさい

今朝のおかぞは何おかぞ
油でいつたてつか味噌
それを食べたらちよいとよかろ
ちよいとよかろ

○

向ひ山で蕨折るのは
人の嫁か　わが嫁か
わが嫁ならば門に立たせて
金の百兩も持たせて
その金がおいやなら

天竺の熊野道者の
肩に懸けたるかあたびら
片裾は梅の折り枝　櫻の折り枝
なかは五條の反り橋
反り橋を渡る渡ると
稚子に袖を引かれて
稚子放せ　袂放せ
放すまいなら京帶と田舍帶と
結び合はせて善の綱
善の綱をば誰に引かしよと
鎌倉のけばが娘に引かしよと

けばが娘は
姉よりも妹手きゝと聞こえた
一つでは　乳をくはへて
二つでは　乳を放して
三つぢやころりと遊んで
四つでは　よりこよりそろ
五つでは　管を卷きそろ
六つぢや六ひろのごうろ機
七つでは　綾や錦を織りそろ
八つでは　約束しそめて
九つでは　此所の此方へお嫁りしそめて

十ぢや殿御と寢そめて
十一ぢや　花のやうなる御子を儲けて
連れて春日へ參らせて
春日の道では
雨は降て來る　水は出て來る
此の雨も　此の水も
今日明日に　引けるなあれば
月に三度の御神樂
朝起きて　空を見れば
七つ小女郎が機を卷く
卷くにや卷いたがお手かけ所を忘れた

教へてたもれよ姑樣
教へるにや教へたが
わが身がどんなで忘れた
その腹立ちに　天の河原へ飛び込んで
身は沈む　髪は浮く〳〵
元結ひが切れて蛇となる
まづ〳〵一貫貸せました

○

きんかん木のうら　うら吹く風
おぢゝやおばゝは

ちやせんちやふろで
ふらり〳〵と身上な
おかごは六尺八まいがた
むかしはやつたとつさの顔
顔たけいなごのおんさのさ
おん侍しゆは敵をうつとて
おかごに轉んでさしたかどん
さゝぬかどん
どんどの神様　どの神さま
此處は桑原　はこ根の火
……

○

京の室町井筒屋様の
一人娘にお駒と云ふて
伊勢へ伊勢へと日頃の願ひ
今年しや十六參らぬ年よ
親の云ふこと耳にもかけず
親の金子を百兩と盗み
襟や袂にはやくけ込んで
紺の風呂敷蛇の目の脚袢
裏の細道しやな〳〵行けば
足は痛となる日は暮れかゝる
此處は何處よと旅衆に聞けば
こゝは逢坂大森小森
もちと下がればお茶屋がござる
お茶屋二軒目に宿屋がござる
宿屋椽側に腰うちかけて
お茶を上げましよお煙草あがれ
煙草あがれもかたじけないが
今宵一と夜のお宿をたのむ
おまへ一人か連れ衆はないか
家を出る時四人のつれ衆
道ではぐれてわしたゞ一人
一人ら旅なりやこゝらぢや泊めぬ
月に三度のお觸れがまわる
お駒それ聞いてほろ〳〵涙
さあさお駒さお泊りなされ
宿を貸します足湯がわいた
奥の座敷に手を引きこんで
さあさおやすみ床とりました
夜の夜半の四つ半頃に
あいの襖をさらりとあけて
襦袢一つでねぢ鉢巻きで

お駒　お駒と二た聲三聲
わしを呼ぶのは誰方でござる
宿の亭主かやれ恐ろしや
金の事なら明日までお待ち
明日は京都へ飛脚を立てゝ
馬に十だん車に四だん
それも聞かずに早や刺し殺し
椽の下へと隱して置けば
犬や狐は利口なものよ
京の室町くはへて通る
あれは井筒屋お駒ぢやないか

まづ〳〵一貫貸しました

○

ほうやほけきよや鶯や
たま〳〵都へ上るとて
梅の小枝で晝寢して
赤阪ばゝさの夢を見た
なんと見て來た語らんせ
奥の奥の奥山で
四十五人で米を搗く
米の中から小娘が

錦爛前掛綾だすき
八つ緒の雪駄でちやらめかす
ちやらり〳〵と行くうちに
おせんの山で足よくぢき
痛やかなしやおば御さま
何か藥はあるまいか
いろ〳〵藥はあるけれど
夏降る雪を手にためて
油で錬つて酢で錬つて
それを付けたらちよとよかろ
ちよとよかろ

○

おう萬さまやおう萬さまや
お前のお歳は幾つでござる
年もかくさず七つでござる
七つ小寺へ打ち上げられて
皷大皷をうち習はして
それも不調法で習ひもし得で
高い椽から突き落されて
低い椽から引き落されて
壹兩壹分の簪をしより

参兩參分の指し櫛をしより
のう父様や　のう母様や
お腹が立つても怺へてたもれ
向ひのれんげを見てたもれ
見てたもれ
向ひのれんげで光るは何だ
月かお星か螢の虫か
月でもないが　星でもないが
大なん様のお江戸へお立ち
お供は誰だ　お供は誰だ
大脇山城左源太さまよ

あゝ此のお留守はかい様よ　かい様よ
かい様お部屋でどんどとなさる
こりや又何事　皷の音か大皷の音か
皷の音でも大皷の音でもないが
おう萬さまのお嫁り仕度
お嫁り仕度は何々ござる
一かん香箱　二かんの手箱
三がん五百の油壺　油壺
油とろ〳〵しんとろ付けて
五尺の元結できりゝと卷いて
竹千代さまや竹千代さまや

あれを見たらば嬉しかろ　嬉しかろ
嬉しうないとは世間の心
しんの心は嬉しかろ　嬉しかろ
一の門越して二の門越して
三の御門をさらりと開けて
おくない様とはどなたでござる
この竹籔の門の中　門の中
門の中にはどなたが御座る
昔淺草身を投げられて
浮いては沈み浮いては沈み
淺草蛙の身を冷やす　身を冷やす

○

天から落ちた芋屋さん
芋は一升いくらだね
三十四文に四十五文
まつと負からかちやからかぽん
お前の事なら負けてやる
笊持つて來い　桝持つて來い
向ふの小母さん一寸おいで
お芋の煮つころばしお茶あがれ
一や二や三や四

五や六や七八　九十
まづ〳〵一貫貸せました

○

わしが姉さん糸取り上手
糸屋一番だて者でござる
五兩で帶買つて三兩でくけて
村の花見に結んで出たら
村の若い衆に抱き止められて
これさ放しやれ帶切れますに
帶の切れたは結びもしよが

緣の切れたは結ばれぬ　結ばれぬ

○

けばや　けばや　お白粉けばや
べつちよとけばつて頰紅さして
口紅さしてお齒黑つけて
えんの子押して髮とき上げて
前髮結ふて兩鬢とつて
かつ山結ふて中指差して
襟元そろへて襦子の帶　襦子の帶

○

天から落ちた孔雀の鳥は
とつて見せましよ名古屋の城で
名古屋のお城は高いお城
一段上り二の段のぼり
三段のぼりて南を見れば
よい子よい子が三人ござる
一によい子は糸屋の娘
二によい子は肉屋の娘
三によい子は酒屋の娘

酒屋一ばんだて者でござる
五兩で帶買つて三兩でくけて
くけ目くけ目にくけ房さげて
縫ひ目縫ひ目に縫ひ房さげて
折り目折り目に折り房さげて
ちやんと結んでお城へ出たら
お城若い衆に抱き〆められて
およしお離し帶切れますに
帶の切れたは結びもしよが
緣の切れたは結ばれぬ　結ばれぬ

蓮華　蓮華　いちよれんげ
蓮華に實のなるそれおばこ
おばこの櫓で毬をつく
毬をつくのは又七か
又七なんぞの女房は
抱いても〆めても物言はぬ
物は言はぬかどうねきか
八つぢや紅かね付けさせて
十ぢや熊野へ參らせて
熊野の坂で日が暮れて
今晩どこへ宿をとる

今晩お寺へ宿をとる

お寺へ泊つて朝見れば
十六七のその姉ご
銚子盃持ち出して
こゝは何處よと聞いたれば
こゝは逢坂森の下
こゝから續いて善光寺　善光寺

○

つきくらおいで　つきくらおいで

勝つたらお手柄　負けたら恥よ
いや恥それ恥　一ち期の恥とおぼしめし
負けた者はないか負けた者はないか
わしが隣の(誰)さんぢやないか
いや恥それ恥　一ち期の恥とおぼしめし
おぼしめし

○

和尚さ何處へ行くわしや伊勢參り
伊勢のやうじやの茶の木の下で
七つ小女郎が八つ子を孕み
産むにや産まれず墮胎すにやおりず
向ふ通るは醫者ではないか
醫者は醫者だが藥箱持たぬ
藥御用なら袂にござる
山ぢや山吹　河原ぢや蓬
これを煎じて飲ませたならば
虫もおりますその子もおりる
若しもその子が男の子なら
寺へ上らせ手習ひさして
京へ上らせ狂言さして
はたち越えたら嫁取つて呉れる

……

○

お前の心とわたしの心と
合ふか合はぬか合はして見ましよ
まづ合ひました
お目出度やお盃　米搗き粟搗き
お手に豆を九つ
九つの豆の數ほど親の在所が戀しくて
戀しくば尋ね來て見よ
篠田の森から四つ足そろへてスココンコン

○

わしの姉さん利口で器用で
裏の小川で小石を拾て
砂でみがいてやすりに掛けて
紙にくるんでお小屋へ投げる
お小屋女郎衆は金だと思ふて
うちで餅搗いて酒買つて祝ふ
酒は諸白　お酌はお花
お花お花はなぜ髪結はぬ
櫛はないか油はないか
櫛は手筐に油は壺に
親に死なれる兄御は江戸に
それが不足で髪を結はぬ
髪を結はぬ

○

おん正正正　正月は
松立つて　竹立つて
喜ぶお衆はお子供しゆう
且那の嫌ひは大晦日
一ち夜明くれば元日で
お茶持つて來い　煙草持つて來い
吸ひ物なんぞを持つて來い
持つて來い

○

さて又飯田の名所には
あかず大手の大目付
中には堀の大和樣
うしろに大きな天龍川
前には高き白山寺
奴なぎには圓悟澤

ひだり松川鯉のぼり
右に天神谷川の
欄干ばしは高いな　高いな
おとゝい來いのお濠ばた
晩に來いとの番匠町
來るか來るかの松尾町
花の田町を振袖で
たゞ一と筋の大横町
手を曳き下る愛宕坂
松川橋をうち越えて
心細々下茶屋の

三二六

行くもかへるも觀音で
腰うちかけて烟草すふ
向ふに見える城山の
榎にとまる鴉さへ
夫婦つがひで啼くわいな

昭和八年七月十五日印刷
昭和八年七月二十日發行

伊那の傳說

定價壹圓八拾錢

著者　長野縣飯田町七三九番地　岩崎清美

發行者　長野縣飯田町一七〇番地　山村正夫

印刷者　長野縣上飯田町四五五六番地　原田增藏

印刷所　長野縣上飯田町四五六二ノ三番地　研究社

發行所　長野飯田町　振替長野六二〇八番　山村書院

發賣所　長野縣伊那町　振替長野三九三五番　上條書店

不許複製

代田製本

岩崎清美著

佐竹蓬平傳

四六版百五十頁
作品寫眞三十七頁
特價壹圓五拾錢
送料十錢

大好評

佐竹蓬平歿してより百廿餘年、幾多の優れた作品は空しく田舍に埋もれて此れを顧みる人さへも少なく、文獻の類又大方は散逸して今や翁が五十八年の生涯の跡は空莫として捉へるにも困難な程になつて居た。一生を鄕里の山村に終つたために、畫名を廣く天下に傳へる機會を得なかつたとは云へ、福原五岳や桑山玉州等と共に大雅堂門下の巨匠、明治以前に於ける信州の美術を代表する者は實に此の佐竹蓬平であつた。特に蓬平の藝術を愛好する著者が多年の研究を要約して佐竹蓬平傳を公にするや、蓬平の名は遽かに都鄙に喧傳せられて其の聲價の頓に高められるに至つたのは決して偶然ではなかつた著者の輕妙なる筆は蓬平の數寄なる一生を描き得て餘す所なく、特に遺作の寫眞卅餘點の中には九州の果てに秘藏せらるゝ逸品數點を加へ、一生を通じての蓬平の藝術を一目の中に見る事が出來る。此の書一度出でゝ地下の巨匠は初めて甦つた。これ偏へに此の書を江湖に推薦する所以である。

發賣所　山村書院　長野縣飯田傳馬町　振替長野六二〇八番

伊那史料叢書刊行會編

市村咸人先生校訂

信陽城主得替記

菊版百五十頁
和綴寫眞入
定價一圓三十錢
送料六錢

最新刊

本書の著者は明でないが元文頃作られたものと思はれる。題名は信陽とあるが内容は信濃の一國内領主代官の交代變遷を簡明に叙述してある。信州に關する舊記類は極めて多いがそれは一地方一郡に限られ全信州を取扱つたものは稀れである。本書は全信州の城地陣屋屋鋪關番所古城跡を地理的の順序に排列し、それに一々の沿革が記されてあることは其の一大特長で、彼の千曲の眞砂や信陽雜誌類に比べると搜索にも便であり、且周圍の關係も極めてわかりがよい。本書の異本は數種ある其中尤も善い本を底本とし六種以上の異本により之を校合し、異說は一々これを補訂又は註記してある、眞に得替記の定本たるべきものであることを自信するもので、鄕土史調査に絕好資料たるべきとは斷じて疑なき所である。

發行所　山村書院　長野縣飯田傳馬町　振替長野六二〇八番

山村書院發行圖書

今井白烏編	近世鄕土年表	特價一圓五十錢	送料十錢
小林郊人編	萬象遺稿集	實費貳圓	送料十錢
市村咸人著	伊那尊王思想史	定價四圓五拾錢	送料二十錢
松花吟社編	平栗猪山句抄	定價一圓八十錢	送料十二錢
小林郊人著	伊那農民騷動史	定價一圓五十錢	送料十錢
伊那史料刊行會編	熊谷家傳記 上中下	近刊	
伊那史料刊行會編	伊那史料叢書	非賣品	

639
134